

限府土井ノ外遺跡出土の土師器に関する研究

中山 圭

はじめに

熊本県菊池市の中心部に位置する限府土井ノ外遺跡（以下、土井ノ外遺跡）は、県立菊池高校の校舎改築に伴い平成一七～一八年にかけて、約四四〇〇㎡の発掘調査が実施された。その結果、方形に区画された溝の内外に掘立柱建物跡、柵列跡が検出され、中世後期の大量の土師器皿や輸入陶磁器が出土した（熊本県教委二〇〇九）。当該地近辺は、南北朝期に南朝を支え、戦国期には肥後国守護として君臨した菊池氏の本拠地があったと考えられており、東端の菊池神社・菊池公園を有する丘陵「城山」を起点に、東西軸の守護城下町が展開したと想定されている。現在の字界を見ても、「御所小路」等数本の軸的街路に面して方形区画が整然と展開しており、その名残を見ることができる。

菊池氏の居城は、元来、城山上の「菊池城跡（限府城）」と理解されてきたが、平成八年に青木勝士氏が、全国で進展しつつあった中世都市研究の成果を基に、限府町内に残る字名「屋敷」に着目、平地の守護館有力地として比定した（青木一九九六）。この「屋敷」に東接する字が「土井ノ外」であり、南北朝期に下向していた懷良親王が手植えしたとされる「將軍木」もその区画を含む。その後に行われた土井ノ外遺跡発掘で上記成果が見られたため、当然、菊池氏居館としての可能性が論じられることとなった。ただし、調査報告

書内ではその比定については慎重な見方をしており、一方、青木氏は同遺跡を守護館の一部と評価している（青木二〇二〇）。

このような中、筆者は、報告書の実測図等から青磁琮形瓶など輸入陶磁器の奢侈品が出土していることを知り、これら遺物は土井ノ外遺跡の空間特性の復元上、大きな影響を与えるものとの認識を持ったが、そのことを指摘した先行研究は見られなかった。そのため、菊池市教育委員会が進めている「菊池一族の歴史文化資料の調査研究」事業の採択を受け、熊本県教育委員会が所蔵する土井ノ外遺跡の輸入陶磁器の研究を行い、成果を前稿にまとめたところである（中山二〇二一A）。

結果、限府土井ノ外遺跡の輸入陶磁器について、未報告資料の抽出・図化提示を出発点として、青磁の優品である各種瓶類や酒海壺他の奢侈品が多数含まれていること、青磁器台・青磁播鉢・法花壺・褐釉磁器等全国的に見ても希少な輸入陶磁器が出土していること、天目茶碗以外にも、風炉・茶臼・茶入等の茶道具が過不足なく揃っている状況等を確認することができた。また、遺跡出土破片を、各地の美術館伝世品や他遺跡出土遺物と比較検討することで、その希少性・重要性が把握された。特に首里城跡京の内の一括資料の組成と近い遺物を抽出できた点は、今後の比較研究への進展や南方との交易交流を考える上で、重要な基礎資料と位置付けることができたと考えている。出土した青磁瓶（花生）・水注類や茶道具等の使用状況に

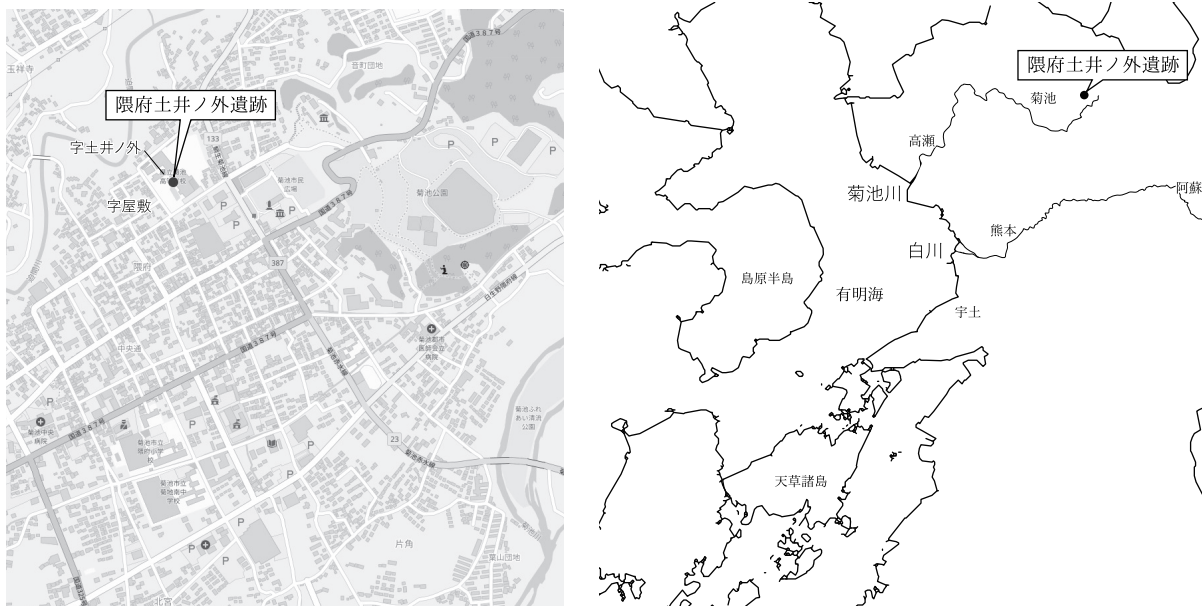


図1 限府土井ノ外遺跡位置図

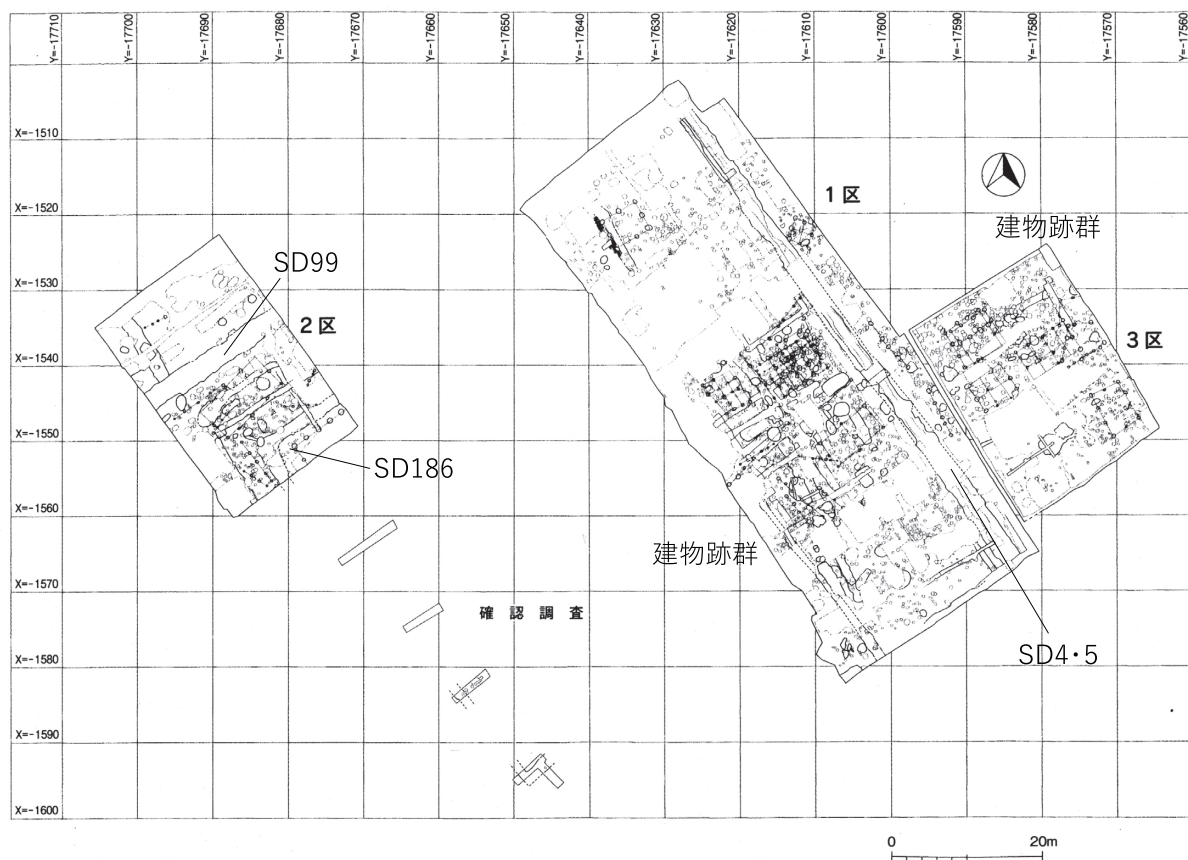


図2 限府土井ノ外遺跡調査区・遺構配置図

ついで、中世段階の花飾りの故実書『立花図巻』や座敷飾りの規定書『君台観左右帳記』の記録と対比し、限府土井ノ外遺跡には、守護館クラスの会所が存在した可能性が高いことを指摘することができた。

一方、課題として「輸入陶磁器破片の点数計測による、碗皿の出土状況を通じた遺跡の存続年代の見直し、盛期の捕捉」を掲げ、これについても、一応の見通しを別稿で論じた（中山二〇二一B）。

また、もう一つの課題として、限府土井ノ外遺跡出土遺物の大部分を占める、土師器の分析の必要性も掲げた。土師器は、硬質で長期間の使用に耐える輸入陶磁器に比べ、耐久性が低く、在地で生産される特性から大量消費されることが多く、結果としてモデル更新の間隔が短い。このため編年の基準資料として優れているが、その形態変遷を追求するためには、大量の破片資料が必要となる。限府土井ノ外遺跡では出土量が多く、その要件を満たしている可能性が高い。また、土師器は様々な用途に使用されるが、特に主殿空間等における献杯儀礼での消費が特徴づけられているため、輸入陶磁器と併せて、出土地点周辺の空間復元に有効な資料となり得る。本稿では、引き続き限府土井ノ外遺跡の特質をより明らかにするため、出土土師器の分析から、遺跡の時代変遷や出土空間の再構成を目指すものである。

一 輸入陶磁器の出土状況からみる土井ノ外遺跡の年代観

（一）報告書の輸入陶磁器評価に関する問題点と未報告資料の抽出
土師器の分析の前に、まず輸入陶磁器供膳具（碗・皿）の出土状

況と沖縄編年に照らした年代観の確認作業を行っておく。

調査報告書では、龍泉窯系青磁について四〇点が図化されており、それ以外の輸入陶磁器は八点と少ない。そのうち、年代の指標になりそうな青磁碗を見ると、無文端反碗（沖縄編年Ⅳ―Ⅰ類もしくはⅤ―Ⅰ類）、無鎬蓮弁文碗（同Ⅴ―Ⅰ類）、雷文帯碗（同Ⅴ―Ⅱ類）、細線蓮弁文碗（Ⅵ―Ⅰ類）が見られ、特に雷文帯碗と細線蓮弁文碗が主体として掲載されていた。

近年、豊富で多様な輸入陶磁器の出土状況を基盤として、年代観の活発な議論を重ね、編年の細密化が進展している沖縄編年から（瀬戸二〇一七）、これらの年代観を位置付けると、Ⅳ―Ⅰ類・Ⅴ―Ⅰ類・Ⅴ―Ⅰ類は概ね瀬戸四期（二三五〇―一四二〇年頃）、Ⅴ―Ⅱ類は瀬戸五古期（一四二〇―一四六〇年頃）から瀬戸五新时期（一四六〇―一四八〇年頃）、Ⅵ―Ⅰ類は瀬戸六期（一五世紀末―一六世紀前半）の基準資料として該当する。

このため、報告書掲載の輸入陶磁器からみると、少なくとも一四世紀中葉から一六世紀の前半まで遺跡が存続していると考えられる。調査報告書では遺構の切合い関係を基軸に、遺構の消長をⅢ期に区分し、それぞれⅠ期を一四世紀後半―末、Ⅱ期を一四世紀末―一五世紀初頭、Ⅲ期を一五世紀初頭―前半と設定しており（熊本県教委二〇〇九）、この時期区分では、土井ノ外遺跡が一世紀に納まることとなり、また、各画期は三〇年程度となり、いささか窮屈となる。遺構の時期決定に関する基準が不明瞭で、本稿で取り扱う土師器は、未だ熊本地方では中世後期の詳細な編年は組まれていないため年代決定に利用しがたく、おそらく輸入陶磁器の既存の年代観を指標に年代を定めたものと推測されるが、依拠した陶磁器編年も明

らかでない。報告書の遺構年代観と、先の沖縄編年との齟齬は五〇年以上に及び、例えばⅠ期内（一四世紀代）で廃絶するとされる溝SD九九は、出土遺物の主体がⅤ―Ⅱ類の雷文帯碗であるので、沖縄編年に照らせば廃絶は早くとも一五世紀中葉以降と考えられ、報告書内の画期と相当のズレが生じる。

以上のように、報告書内の年代観は、再考が必要と思われる状況にあった。このため、これまでの調査において、未報告資料も含む全輸入陶磁器の破片を実見し、沖縄分類に照らして、点数計測を行った。その結果、青磁・白磁のみならず、青花磁も一定量出土しており、数は少ないものの、青花E群碗や漳州窯産青花磁など一六世紀後半に出現する輸入陶磁器の存在も確認できた。このため、隈府土井ノ外遺跡の存続年代は、ほぼ室町時代全体にわたる可能性も出てきた。

（二）輸入陶磁器の出土数

出土している陶磁器片について、種別・器種・分類ごと、及び出土地区・遺構・グリッドごとに点数をカウントし整理したものが表一・二である。カウント作業は、土井ノ外遺跡の遺物を収蔵する熊本県教育委員会文化課文化財資料室内で実施した。収蔵コンテナ（未報告資料）は、出土地区ごとに、土師器類・瓦質土器類・石製品（石そのものも含む）・青磁類（一箱）・陶磁器類（青花・近現代含、五・六箱分あり）に分類され収蔵されており、概ね、輸入陶磁器を含むと思われるコンテナを確認した上で、破片のカウントを実施したが、すべての収蔵コンテナを完全に実見できたわけではないこと、現地での作業時間が限られており分類照合にやや曖昧な点があったこと（特に青磁の無文部位破片）等から完璧に正確な点数計上・分類が成果

としてできたとは言い難い。それでも、概ねの傾向としては、的外れなものではないと考えている。

両表左列の地区・遺構名・グリッド名は、それぞれ破片が収納されていたビニール袋に同封されていたラベルの記述を第一の指標とし、ラベルがない場合は破片の注記を元に名称を復元した。表中、「Ⅰ区Ⅴ―EG」等とあるものは、グリッドごとの取り上げと推察されるが、報告書にグリッド名の明記がないため、現段階では詳細な出土位置が不明である。同じ理由で、ラベルに遺構名が記してあるものの、報告書上、当該遺構の名称が見られないものもあり、これも出土地点が判明しない。このため、本稿では個別遺構の年代的評価に踏み込まず、一―三の各調査区の概ねの出土傾向を中心に検討せざるを得なかった点をお断りする。表中、左列は上から一区・三区・二区の順に配列しているが、これは一・三区が隣接しており一体的な位置空間と考えられたため、それに対し、二区はやや離れた調査区になるため、地域ごとの傾向を見る上で都合がよいため、このような配列とした。よって、土井ノ外遺跡は、一・三区と二区の大きく二エリアに区分されると捉えている。

なお、分類の基準は沖縄分類（瀬戸ほか二〇〇八）、一部中世前期の遺物は太宰府分類（太宰府市二〇〇〇）を適用している。

（三）カウント結果の分析

輸入陶磁器は総計六六五点が確認された。内訳は、青磁四六五点、白磁五九点、青花一〇四点、その他三七点であり、主体は一五世紀代の龍泉窯系青磁が占める。青磁の組成で、最も多い種類は雷文帯碗（Ⅴ―Ⅱ類）で四六点である。次いで、細線蓮弁文碗（Ⅵ―Ⅰ類）

表 1 限府土井ノ外遺跡出土 青磁分類表

出土地区・遺構	器種・分類	青 磁 分 類														青磁片分類不可
		甗	香	瓶	水注	琮形瓶	広口壺	酒海壺	器台(小)	器台(大)	唾鉢	白象嵌青磁	型物・袋物不明	ⅢⅠⅠ類(内面調花文)	ⅢⅡⅠ類(筋線文)	
調査報告書掲載遺分	ⅢESD4		1													
	ⅢESD5	1	1													
	ⅢESD18															
	ⅢESD121													1		
	ⅢESD85	1													1	
	ⅢESK9	1														
	ⅢESK59														1	
	Ⅲ区出土遺物	1							1					1		
	ⅢESK30・31														1	
	ⅢESB64				1											
	Ⅲ区出土遺物			1	1									1		
	ⅢESD99	1														
	ⅢESD186		1											1	1	
調査報告書未掲載遺分	ⅢESK131															
	Ⅲ区出土遺物	1														
	Ⅲ区一括	8	6	1					1	1			1	1	1	1
	ⅢE2b解															
	ⅢESB															1
	ⅢESB24															
	ⅢESB25															
	ⅢESD	3	1	2		1	1					1	2	1	2	20
	ⅢESD4															
	ⅢESD5															
	ⅢESD18															
	ⅢESD33															
	ⅢESX55														1	
	ⅢESX58														1	
	ⅢESX59															
	ⅢESK	1											1			
	ⅢESK36															
	ⅢESK42															
	ⅢESK52													1	1	
	ⅢESK100															
	ⅢESK219	1														
	ⅢESK220															
	ⅢESK222															2
	ⅢESK223															
	ⅢESK232															
	ⅢESK233															
	ⅢESK240															
	ⅢESK241															
	ⅢEB-G															
	ⅢEC-4G 2b層一括															1
	ⅢEC・E・F-5G カクラン															
	ⅢEC-4 カクラン															1
	ⅢED-G	1														
	ⅢEE-G	2												1	1	1
	ⅢEE-4G 2b層一括			1										1		
	ⅢEE-4 2層一括															
	ⅢEE-5G カクラン															
	ⅢEE-6G															
	ⅢEF-G	1	1	1			1	1					1			
	ⅢEG-5G															
	ⅢEG-13G															
	ⅢEH-G															
	ⅢEP	1														
	ⅢEPK8															
	ⅢEPR211															
	ⅢEP424															
	ⅢEP0233															
	ⅢESX	1												1	1	2
	Ⅲ区一括			1										3	1	3
	Ⅲ区カクラン															
	Ⅲ区1層一括															
	Ⅲ区2a解	1														
	ⅢESK30・31															
	ⅢESK-87															
	ⅢESB-72G															
	ⅢEC-14G															
	ⅢED-12	1														
	ⅢED-13G															
	ⅢED-14															
	ⅢED-14・15															
	ⅢEE-12G															
	ⅢEE-13															
	ⅢEE-14G															
	ⅢEE-15G															
	ⅢEF-13G															
	ⅢEF-14a															
	ⅢEF-15a															
	ⅢESX31埋土層一括															
	Ⅲ区一括		3											1	2	1
	Ⅲ区カクラン一括															
	ⅢESD99															
	ⅢESD99埋2・4・5層															
	ⅢESD99埋3層															
	ⅢESD186															
	ⅢESD186埋5層															
	ⅢESD268埋1層	1														
	ⅢESD272埋土層一括															
	PB793															
	SK106・111・158・159・164															
	2b層一括															
	SA251PIT2	1														
	E-2G・E-3G・F-3G															
	出土地未確認	27	5	15	4	1	1	3	1	2	1	1	1	8	4	6

青磁計
465点

表2 隈府土井ノ外遺跡出土 白磁・青花・他貿易陶磁分類表

[illegible]

が三八点、無文玉縁・直口碗三四点（V—〇類）、無鎬蓮弁文碗（V—一類）一八点となる。明瞭に、IV—〇類と確認できた破片は五点のみでV類破片よりかなり少ないため、V類段階から陶磁器が増加するのは確かであるが、主に端反口縁部の破片で、筆者の同定力不足によりIV・IV・V類分類不可としたものも二六点あり（註二）、今少しIV類もしくは、IV類段階からの遺物が多くてもおかしくはない。白磁は四都窯系のD類と景德鎮窯系のE類がほぼ拮抗している。白磁D類は瀬戸四期・五古期・五新期（概ね二三五〇～一四八〇年頃）に使用され、白磁E類は六期（一五世紀末～一六世紀前半）になり白磁の主流となる。

青花はB一群皿が二六点と最も多く、次いで端反り碗一六点、E群碗一〇点となる。B一群碗は四点と計上しているが、今回、確実にB一群碗の特徴を備えているものだけをB一群としているが、「端反碗」と計上した破片の中で、B一群に含まれるものが多数あると思われる。端反り碗・B一群碗は、柴田圭子氏の整理図によれば（柴田二〇一一）、概ね一五世紀代に属すると理解して支障はない。であれば、青花類も、土井ノ外遺跡では盛期は一五世紀にあると考えられる。白磁もこの様相に齟齬は無い。

瀬戸六期の指標となる青花C群碗・皿、七期の指標となる青花E群碗・皿、漳州窯系青花皿類の出土も、未報告資料の抽出の中で確認できた。C群碗・皿が各六点、E群碗が一〇点確認できている。このことから、瀬戸六期以降も限府土井ノ外遺跡は機能していたことが確実である。遺構との関係ではC群・E群ともSD四・五から出土がみられており、このことから同溝は一六世紀後半まで機能していた可能性がある。ただ、全体の数としては、青花C群の数量は非常

に少なく、盛期である一五世紀中葉に比べると衰微気味であったことは間違いない。

これら青磁・白磁・青花各碗皿の出土状況からは、土井ノ外遺跡の存続年代は、概ね瀬戸四期（一三五〇～一四二〇年頃）から始まり、瀬戸五古期（一四二〇～一四六〇年頃）～五新期（一四六〇～一四八〇年）にかけてピークがあり、六期（一五世紀末～一六世紀前半）以降は衰退しつつも、細々と継続する、とみることができよう。

さて、改めて表に戻ると、青磁奢侈品（盤・瓶・壺・袋物型物類）の数が七〇点にのぼり、全体の点数から見ても一割を超える比率を占める。前稿（中山二〇二一A）で確認したように、その中には、瓶・水注・鉢など列島での類例が限られる希少な破片が多く、その特殊性がうかがえる。また、青花大皿や法花壺、褐釉磁器、朝鮮象嵌梅瓶等も同じく希少な遺物といえるだろう。そのほとんどは、一区もしくは三区から出土しており、二区からは香炉や若干の盤が出土している程度にすぎない。このことから推測するに、一・三区周辺に、会所等の室礼具を多数保有する空間が展開していた可能性が高い。現段階では、個別の建物遺構のどれが会所遺構にあたるか、等については比定が困難であるが、今後、個別の遺構出土の遺物等から空間復元を検討していく必要もあるだろう。

出土遺物の多くが、包含層やカクラン層からの出土とされているので、各奢侈品が一時期にどの程度併存していたかは担保できないが、確認できた希少な遺物群を見ると、一・三区には唐物奢侈品を多数飾り立てる空間がかつて存在した蓋然性は高い。そう考えると、土井ノ外遺跡は守護館レベルの居館であった可能性は高いものと考えられる。

さて、輸入陶磁器は、全国各地の中世遺跡から出土しており、年代の物差しとして共通の編年が利用できる点で、利用価値が高い。一方で、食器としての耐久性が高いことから、入手から廃棄までのスパンが長期間になる可能性が考えられる。このため、少点数の輸入陶磁器片に依拠した遺構年代は、往々にして見誤ることがある。これに対し、素焼きの土器である土師器は、もろく汚損しやすい。このため、一度から数度の利用で廃棄されることが多く、生産から廃棄までのサイクルが短い。生産年代と廃棄年代がニアイコールとなり、より正確な遺構年代の捕捉に役立つのである。

しかし、土師器を編年の参考として使用するためには、当該地域における土師器の形式変遷を明らかにし、さらに絶対年代に当てはめる必要がある。このような土師器編年は全国各地で構築されているが、熊本県下においては、中世前期こそ美濃口雅朗氏により設定されているが（美濃口一九九四）、中世後期については未編成である。さらに土師器は在地性が強く、旧国単位（現在の県レベル）でも地域ごとの差異が顕著で、比較検討が難しい。本研究において、取り上げた限府土井ノ外遺跡の土師器の形状も、筆者が日常的に調査研究に携わっている天草地域の土師器とは、全く形状が異なっている。おそらく中世後期における土師器の生産と流通は、支配勢力単位や平野ごとなどの地理的単位、あるいは都市・集落単位の、ローカルで完結している場合が多いのであろう。以下、出土土師器の検討を通じて、菊池地域における中世後期の編年案を提示したい。

二 出土土師器の分析

（一）出土土師器の特徴と分類

報告書（熊本県教委二〇〇九）に掲載された土師器の点数は三七二点で、輸入陶磁器報告数四〇点の九倍強である。土師器は破片になると実測に耐えない資料も多いため、未報告資料分はコンテナに多数収蔵されている。収蔵状況を瞥見した印象から、輸入陶磁器の総点数六六五点に対して、土師器破片の点数総数は報告書比率である九倍以上、点数として一万点を超える可能性がある。他の出土遺物として播鉢などの瓦質土器も多数あるが、出土遺物の大多数を土師器が占める傾向は確かである。

土師器は、概ね口径一〇～一二cmほどの坏、口径七～九cmほどの小皿の二種類があり、中世後期の各地の傾向に整合している。今回は、器形の特徴が把握しやすい坏の特徴を中心に分析を行い、遺構出土の土師器を抽出し変化の方向性を見出すこととする。限府土井ノ外遺跡では、文献記録と対比できる土層など絶対年代の手がかりに乏しいのが実状だが、共判する輸入陶磁器や広域流通品（備前焼播鉢等）などを参考に相対年代を推定したい。通常であれば、大友氏館跡や大内氏館跡などのように、周辺地域も含めた多数の発掘調査を経て、一括性の強い遺構から出土した遺物を素材に、器形の連続性やセリエーションから、編年を構築するべきであるが、限府土井ノ外遺跡は一度の調査しか経ていないため、良好な遺構が少なく資料的制約が多い。牽強付会との批判は覚悟の上で、それでも、一応の編年案を提示しておくことは今後の菊池一族に關係する遺跡調査の発展のため

に無為ではないと思われる。今後の議論の基礎になれば幸いである。

図三は、豊後大友氏館跡から出土した土師器の系統分類図である（長二〇・二一A）。中世前期から続く断面箱型の在地系土師器のA系統、工具を使用した同心円状の内面の調整が特徴的なB系統、さらに京都の儀礼受容をエポックとして導入されたと考えられる、回転台を用いない手づくねによる「京都系土師器」のC系統が確認されている。これらの土師器は、時期的変遷により消長があり、一四世紀代から一五世紀末までA系統土師器が主体であるが、一五世紀末にB系統土師器がこれを駆逐し、さらに一六世紀初頭にC系統土師器が導入され、一六世紀代はB系統とC系統が併存しながら、それぞれに器形を変化させていくことが明らかにされている（図四・五）（長二〇・一五・二〇・一八ほか）。これに政治的な結びつきがあった山口の大内氏関連地から持ち込まれたと考えられる大内式土師器が加わる構成となっている。

さて、図三に見られるA系統土師器はプロポーションが多様だが、これによく類似したものが限府土井ノ外遺跡からも確認される。その理由は定かではないが、当時、地域を越えた土師器の普遍性があったものかもしれない。これらのグループは、限府土井ノ外遺跡でも坏A類と位置付けておこう。坏A類には、口径と底径の差が少なく体部が内湾して立ち上がるタイプ（Ae）、体部が直線的に開くタイプ（Ah）などが見られ（図六上）、さらに口縁部形状にバリエーションが見られる。それぞれに対応する小皿も類型がある。これらは、菊之城跡などから出土した中世前期土師器の系譜を引き継いだものと捉えられよう。

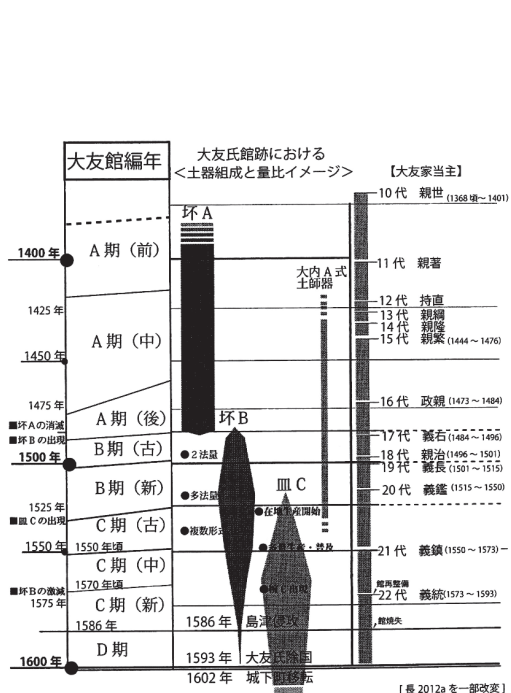
これに対し、限府土井ノ外遺跡で特徴的な土師器も見られる。体

部の中ほどが強く外へ屈曲し、外面に明瞭なナデの痕跡が残る土師器坏がそれであり、本稿では坏B類とする（図六下）。この種の土師器は、土師器を一括廃棄した土器だまり遺構である、SK八・九・一〇、SK一六・一七や溝遺構SD一八などで数多く出土しており、限府土井ノ外遺跡の土師器の主体を占める。またプロポーションや焼成状況による変化も看取される。器形が似ているが細部に違いがある坏BrとBsの先後関係の把握が重要になる。なお坏Bfは在来系のA類に位置付けの方が妥当という可能性もあるが、胎土・焼成の状況、見込みの盛り上がり方などにBsとの接点があるように考えられたため、ひとまずB類に位置付けておきたい。

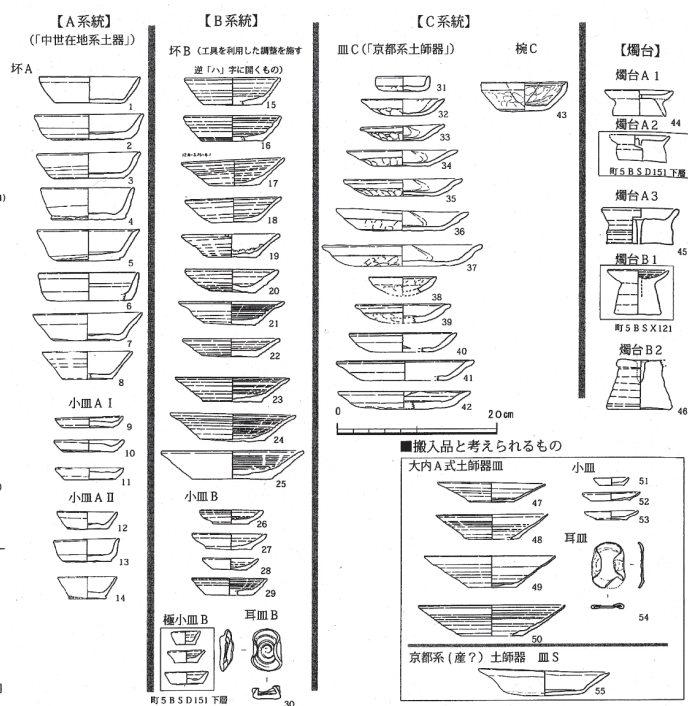
（二）坏B類の変化

坏Brと坏Bsは共に体部が大きく折れる器形が共通しているが、異なる点も見られる。まず、胎土・焼成について、Brは硬質焼成で堅緻ながら、内外器面に凹凸がびつりとみられる例が多い。これは、Brの胎土がやや粗いために発生した現象の可能性があり、見込みにヒビ割れや糸切り底面に穴状の窪みが確認される事例も多い。また、外側屈曲点に対応する内器面の変化点に明確な稜が見られる例が多く、このため口縁部は鐙状の受け縁的な様相を呈している。見込み部分は、ボタン状に盛り上がるものと盛り上がりがないものとそれぞれがあるが、特に見込みが盛り上がりがないタイプに、見込み部の焼成ムラが看取できる。焼成時に何らかの物質を見込みに載せて焼いたために発生した焼けムラのように思われる。いわば備前焼の「ボタモチ」的なものである（図六Br写真）。

これに対して、坏Bsは、不純物の少ない胎土のため、器面の凹凸



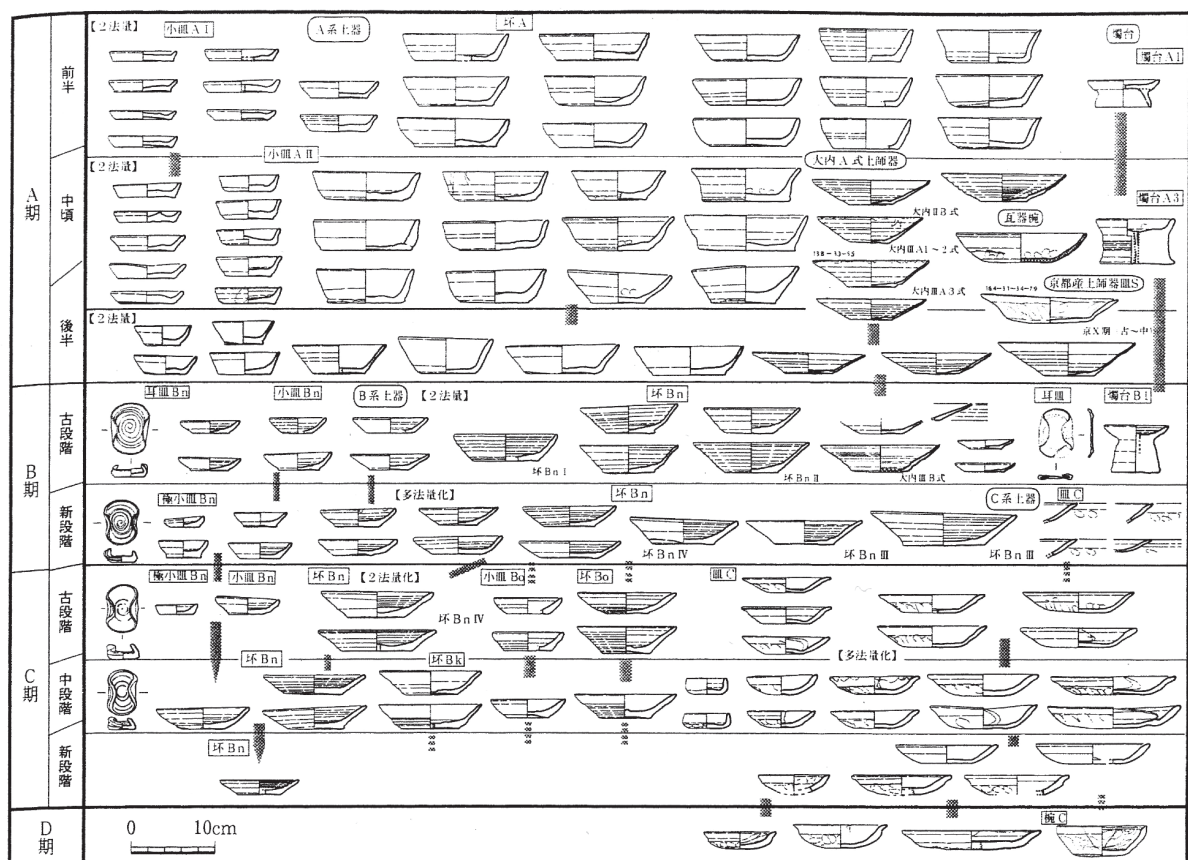
長 2015 より



長 2011A より

図 4 大友氏館跡土師器編年と当主の関係図

図 3 大友氏館跡出土土師器の系統分類図



長 2018 より

図 5 大友氏館跡出土土器変遷図

が少なく、焼成はBrよりは軟質で橙色のことが多い。底面の窪みは少なく、見込みはボタン状に盛り上がるタイプが多い。その際、凸部の周縁にヘラで刻んだ圈線が二、三周廻るものが多い。この特徴は、同じ焼成の小皿でも特徴的で、坏Bsとセット関係にあることを示唆している。外側屈曲部に対応する内器面の屈曲はなだらかで、稜の強いBrと異なっている。器高はBrの方が全般的に低い。

坏Bfは、体部が朝顔状に外に向かって反りながら開く。器高が高い反面、底径はやや小さい。黒色の煤もしくは使用の汚れが付着しているものが多いため、胎土や焼成色が不分明なものが少なからずあるが、概ね橙色もしくは褐色であるものが主流である。見込みは盛り上がるものとフラットのものがある。外面に強いナデが見られるものがあり、橙色の色調から坏Brに類似しており、坏Bに分類した。

報告書掲載の坏について、出土遺構ごとに各分類の平均値を表にしたものが表三である。これには参考例として菊之城跡トレンチ一包含層出土の平均値を付した。菊之城跡のトレンチ出土土師器は、包含層であるので概ね一三世紀頃と、おおざっぱな年代しか言及できないが、口径一二・九八cm、底径九・六二cm、器高三・四五cmとなっている。これに対し、例えば、SK一〇の坏二六点の平均値は、口径一〇・六八cm、底径六・〇九cm、器高二・六二cmを測る。器高については坏Bfのように高いものもあるので、一概に言えないが、中世後期の平均は前期の土師器より口径・底径とも二、三cm小さくなるものと理解できよう。つまり、中世後期には土師器坏は小型化の傾向にあると考えられ、これは全国的に共通している。

坏Brは主にSD一八から多く出土しており、出土二二点の平均は、上から口径・底径・器の順にそれぞれ、一一・二二cm、六・七〇cm、

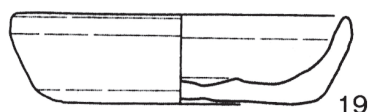
表3 限府土井ノ外遺跡出土土師器坏の遺構・分類ごとの平均法量値一覧 単位＝cm

	計測点数	口径	底径	器高	備考
菊之城跡トレンチ1包含層	24点	12.98	9.62	3.45	13世紀頃・参考値
SD33 坏Ae (内湾)	8点	11.12	8.01	2.83	
SD33 坏Bf (深端反)	1点	11.00	6.20	3.40	
SD33 坏Br(腰折/凹凸)	1点	11.81	6.00	2.50	
SD18 坏Br(腰折/凹凸)	22点	11.21	6.70	2.55	
SD18 坏Ah (逆ハ字)	6点	11.41	6.95	3.06	
SD121 坏Bs (腰折/滑らか)	15点	11.55	6.38	2.98	
SD121 坏Bf (深端反)	5点	10.90	5.94	3.43	
SD121 坏Ae (内湾)	1点	10.80	8.00	3.30	
SD85 坏Bf (深端反)	1点	10.80	6.10	3.60	
SD85 坏Ae (内湾)	6点	10.71	7.50	2.89	
SK8 坏Bs (腰折/滑らか)	36点	10.37	5.91	2.66	
SK9 坏Bs (腰折/滑らか)	14点	10.82	6.22	2.75	
SK10 坏Bs (腰折/滑らか)	26点	10.68	6.09	2.62	
SK116 坏 大内系?	1点	12.80	4.20	3.50	
SK116 坏Bs大型 (腰折/滑らか)	1点	13.40	7.50	3.70	
SK116 坏Bs (腰折/滑らか)	20点	10.52	5.91	2.80	
SK117 坏Bs (腰折/滑らか)	1点	10.80	6.10	3.00	
SD186 坏Ah (逆ハ字)	4点	11.92	6.80	3.57	
SD186 坏Bf (深端反)	9点	11.33	6.33	3.60	
SD186 坏Br(腰折/凹凸)	1点	12.30	7.20	3.20	
SD272 坏Ah (逆ハ字)	2点	12.65	8.45	3.15	
SD99 坏Bf (深端反)	1点	10.80	5.50	3.10	

坏 A 類

Ae

SD33 出土



- ・口径と底径の差が少ない
- ・体部が内湾気味に立ち上がり口縁部は直立
- ・胎土は桃色が多く、赤色粒を含む

Ah

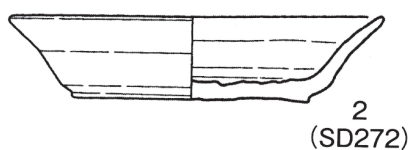
SD18 出土



- ・逆ハ字形に開く器形
- ・体部が直線的に立ち上がる
- ・胎土は褐色形で、金雲母を含むもの多い

Aeh

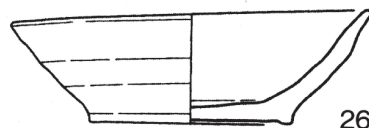
SD272 出土



- ・口径と底径の差が少ない
- ・体部は端反器形になる
- ・胎土はベージュ系。出土数少ない。

Ahh

SD186 出土

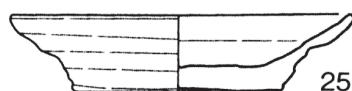


- ・逆ハ字形に開く器形
- ・体部は腰部でやや張り、口縁は端反
- ・胎土は褐色形で、金雲母を含むものあり

坏 B 類

Br

SD18 出土



- ・腰部で強く折れ曲がる
- ・口径はBsより広く、器高は高め
- ・外部は強いナデ
- ・見込みは盛り上がりフラット
- ・屈折部の内器面側は稜が明瞭
- ・胎土は砂粒が多く、焼成が高度のためか器面が荒れ、凹凸がある。

Bs

SK8 出土



- ・腰部で強く折れ曲がる
- ・外部は強いナデ
- ・見込みの中央がボタン状に盛り上がるか、見込みの際に沈線が入るもの多
- ・屈折部の内器面側はなだらか
- ・胎土は橙色で、焼成良好のもの多

Bf

SD121 出土



- ・体部は直線的に開く
- ・体部の器厚が一定
- ・器高が高い
- ・底径が小さい
- ・見込みは中央部が盛り上がるか際に沈線が入るもの多
- ・胎土は良好で、橙色系多



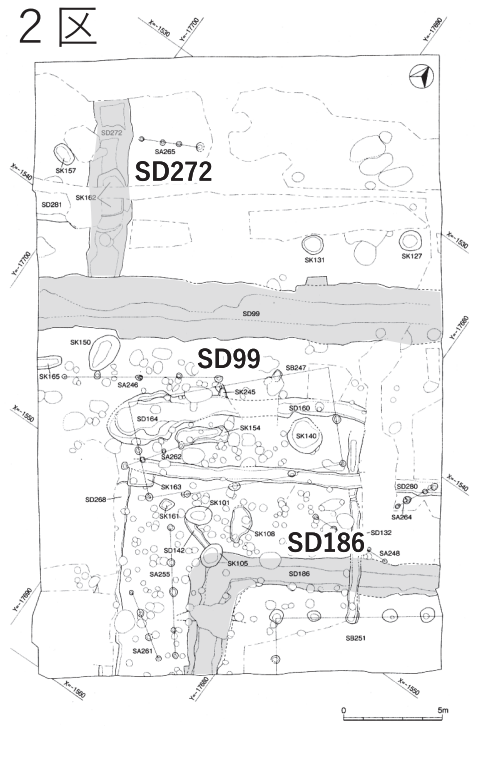
坏 Br



坏 Bs

図6 隈府土井ノ外遺跡出土土師器分類案

2 区



1 区

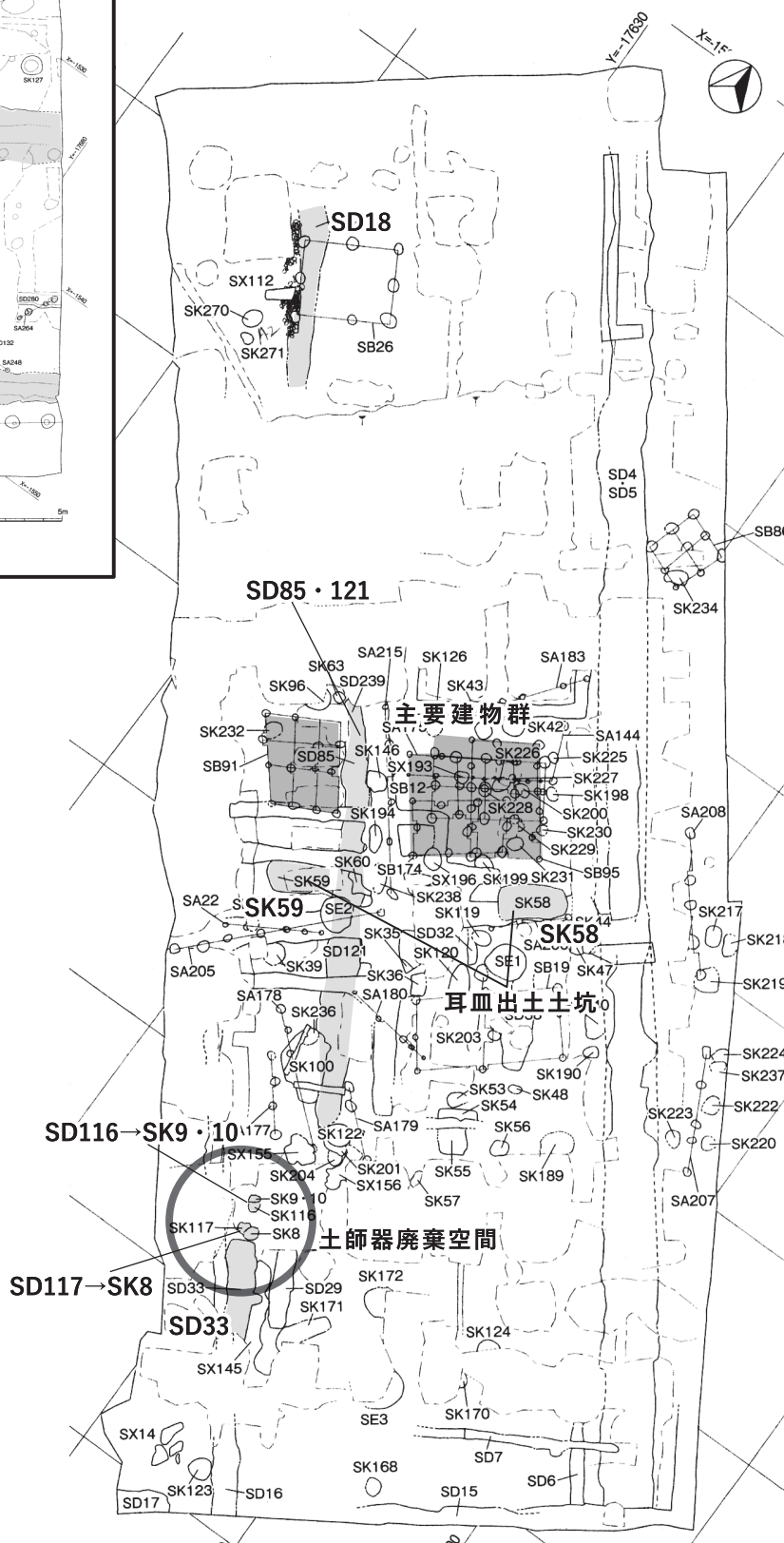


図 7 土師器出土主要遺構配置図

二、五五cmとなっている。坏BsはSK八・九・一〇・一一六・一二七の土器一括廃棄遺構から主に出土している。遺構としてSK一二六はSK八に、SK一二七はSK九にそれぞれ切られており、このため、SK一一六・一二七がSK八などより古いと考えられる。坏が一点しか出土していないSK一二七以外の複数平均値は、SK八は三六点で二〇・三七cm、五・九一cm、二・六六cm。SK九は一四点で二〇・八二cm、六・二二cm、二・七五cm。SK一〇では二六点で二〇・六八cm、六・〇九cm、二・六二cm。SK一二六は二〇点で二〇・五二cm、五・九一cm、二・八〇cmを測る。SK八・九・一〇と、SK一二六の数値には、若干SK一二六の方が器高が高いものの、他に顕著な差は見られない。

坏Brと坏Bsでは、口径・底径は坏Brが一回り大きく、逆に高さは坏Brの方がやや低いと捉えられる。イメージ的には坏Brは、坏Bsを上から押しつぶしたようなスタイルと言えようか。その先後関係の推定は、共伴遺物も加味して判断する必要があり、次節で考えることとしよう。

(三) 共判事例の抽出

次に各遺構の廃絶年代の検討から土師器の年代観を考える。本来であれば、短期間で遺構が形成され廃絶した遺構を抽出することが望ましいが、隈府土井ノ外遺跡ではSK八やSK一一六などに限られている。そこで、本稿では次いで土師器がまとまって出土している各溝遺構(SD)も対象として分析を進めたい。本来、溝遺構は利用期間が数十年にもわたる可能性があり、廃絶の作法も徐々に埋まっていく場合と一気に埋めってしまう場合があり、この点は現地で土層の堆積から判断されるものであり、本研究では言及できない。各溝から

出土した輸入陶磁器を見ると、複数の形式破片が確認されるものがあり、その場合は最も新しい遺物を廃絶年代の参考とするのが妥当である。以上の点に留意して、各遺構の土師器と共伴遺物の関係を類推する。遺構の位置は図七を参照されたい。

●SD八五・一二二(図八・九・一二)

一区中央部に位置し、主要な掘立柱建物跡群を区画するように約二〇mほど南北に走っている。SD八五・一二二・二三九と三つの遺構番号に区分されているが、実際には一本の溝と考えられている(熊本県教委二〇〇九)。輸入陶磁器は、SD八五から無鎚蓮弁文碗(V―一類)と見込みに梅月文を描く青花碗が出土している。この種の青花碗は、一四五九年に失火で廃絶したとされる首里城京の内跡SK一〇一に含まれており(図一〇)、このことから、当該遺構の廃絶は一五世紀の第三四半期頃と想定しておきたい。土師器は深皿形坏Bfや屈折良胎の坏Bs、内湾する坏Aeを主体とするが、坏Brも数点含まれている。

●SD三三(図一二・一三)

一区南西部の溝で、SD二九と並走する。長さ約四m分が残っているが、南側の延長は攪乱層で破壊されている。

出土遺物は内湾の坏Aeが八点あり主体となる。口径の平均値は一・一二cm、底径の平均値が八・〇一cmで、口径と底径の差が少ない。見込みのボタン状の盛り上がりが顕著である。その他の坏は、坏Bfと坏Brがそれぞれ一点ずつ確認できる。共判遺物が少なく、わずかに未報告の資料に中国天目碗破片があるが、遺構単体での年代推

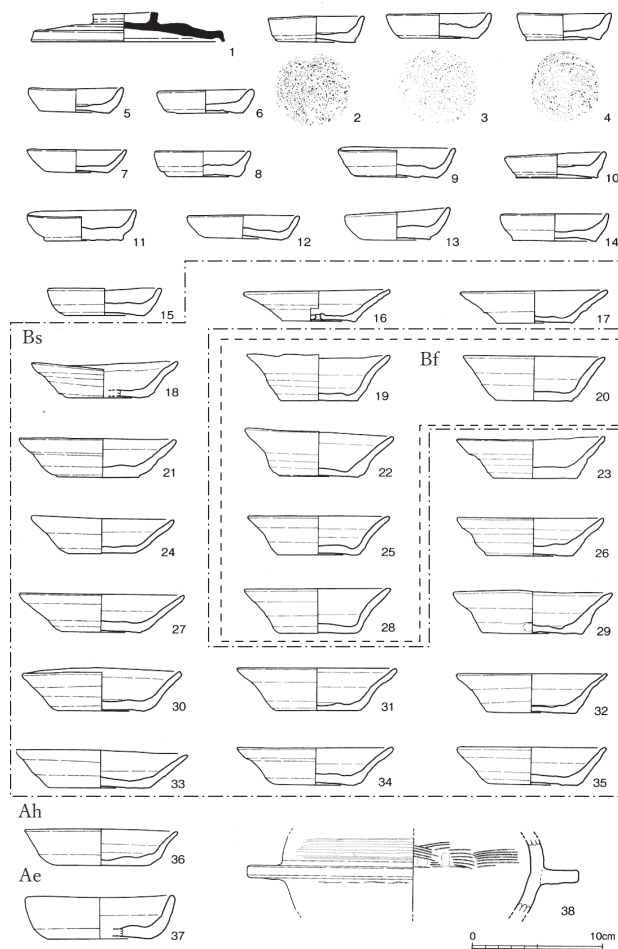


図 8 SD121 出土土師器・共伴遺物

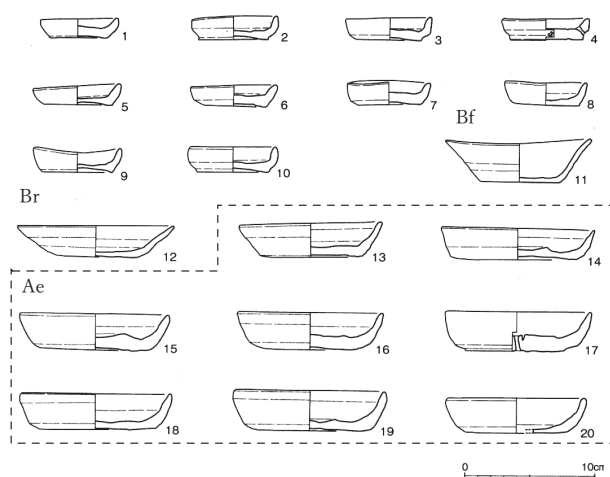


図 13 SD33 出土土師器・共伴遺物

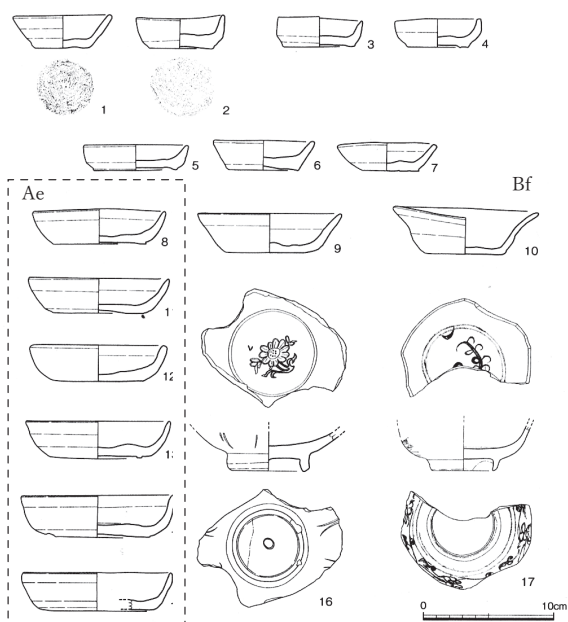


図 9 SD85 出土土師器・共伴遺物

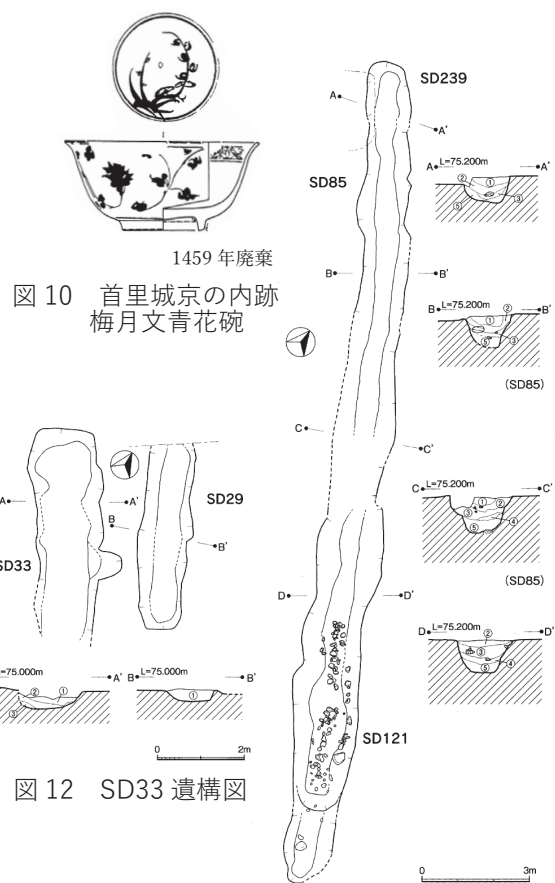


図 11 SD85・121 遺構図

1459 年廃棄
図 10 首里城京の内跡
梅月文青花碗

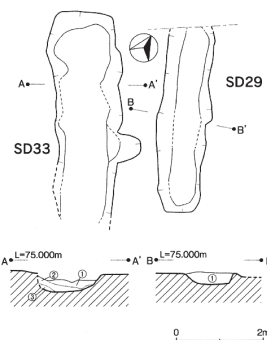


図 12 SD33 遺構図

定は難しい。

●SD一八(図一四・一五)

一区北西部に位置する溝遺構。約7m分が残っており、溝の西側肩部に石敷状の不明遺構SX一二が付属している。

屈折する坏は、すべて坏Brで統一されており、坏Bsは含まれていないが、No.三五はボタン状の見込や胎土が坏Bsに類似する。No.三一・三二・三四・三六・三七は坏Ahでいずれも褐色系の胎土で、中世前期からの系譜を引き継ぐタイプの坏である。一部には金雲母を含むものがある。No.三五は判断に迷ったが、器形から坏Ahグループに含める。

報告書に釉だまりを持つ中国天目碗が掲載されており、また未報告の遺物に、内面口縁部に雷文帯を有する青花端反碗の破片がある(写真)。大きく一五世紀中葉と捉えることができよう。

●SK八・九・一〇(図一六・一八・二二)

SK八と九・一〇は、多数の土器が出土した土器だまり遺構で、一区南西部、SD三三の付近で検出されている。SK八は長軸〇・八四cm・短軸〇・六八cmの円形土坑で、より古い土器だまり遺構SK一一七を切つて構築されている。同様にSK九・一〇(同一の遺構)は、より古い土器だまりSK一一六を切っている。このことから、SK一一七とSK八の土師器、同じくSK一一六とSK九・一〇の土師器には先後関係があるはずである。

SK八・九・一〇のいずれも、坏はBsがほとんどを占めるが、SK八では三点(No.四四・五七・六二)、SK九では一点(No.二五)、

SK一〇でも一点(No.二三)とそれぞれ、坏Brが確認できた。SK一一七のサンプル数が少ないのが難点だが、SK一一六・一一七はすべて坏Bsで、坏Brは含まれないため、SK八等の廃棄時点が、坏BsからBrへの変遷の過渡期にあったと考えたい。

SK八・九・一〇出土遺物は、ほぼ土師器で占められるが、唯一、SK九から龍泉窯青磁が一点出土している(No.三八)。この青磁は、高台付近しかない破片で、素地・釉層とも分厚い。外底は蛇の目釉剥ぎで、釉色は水色である。おおよそ一五世紀代の青磁であるが、報告書では碗とされているものの、器形から皿と判断される。見込みおよび残存の外面は無文である。高台付近からわずかに腰折れして立ち上がる屈曲が認められる。沖縄分類では皿V―〇・三類とされ、腰部部位の径がおおよそ一一・四cmを計測するため、大ぶりのタイプであろう。あるいは欠損している口縁付近では八角形を呈する可能性もある。無文の腰折皿V―〇類は、瀬戸四期(一三五〇―一四二〇年)から現れるが、当該期はかなり長めの期間であり、実際には、SK一一六との関係から、やや新しく見て一五世紀前半頃としておく。

●SK一一六・一一七(図一七・二二・二四)

SK一一六はSK九・一〇によって切られ、SK一一七はSK八によって切られている。これはいずれも土師器の廃棄土坑であり、隈府土井ノ外遺跡では他に土器だまりは確認されていないことから、土器の処分場所が定められていた可能性が高い。

SK一一六は小皿二〇点、坏二三点が出土しており、また一点のみ口径三・二cmの極小小皿がある(No.一)。坏二三点のうち、二一点は

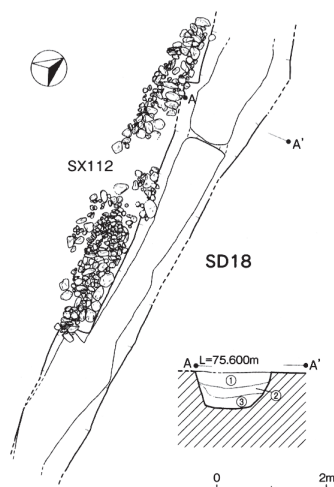


図 14 SD18 遺構図

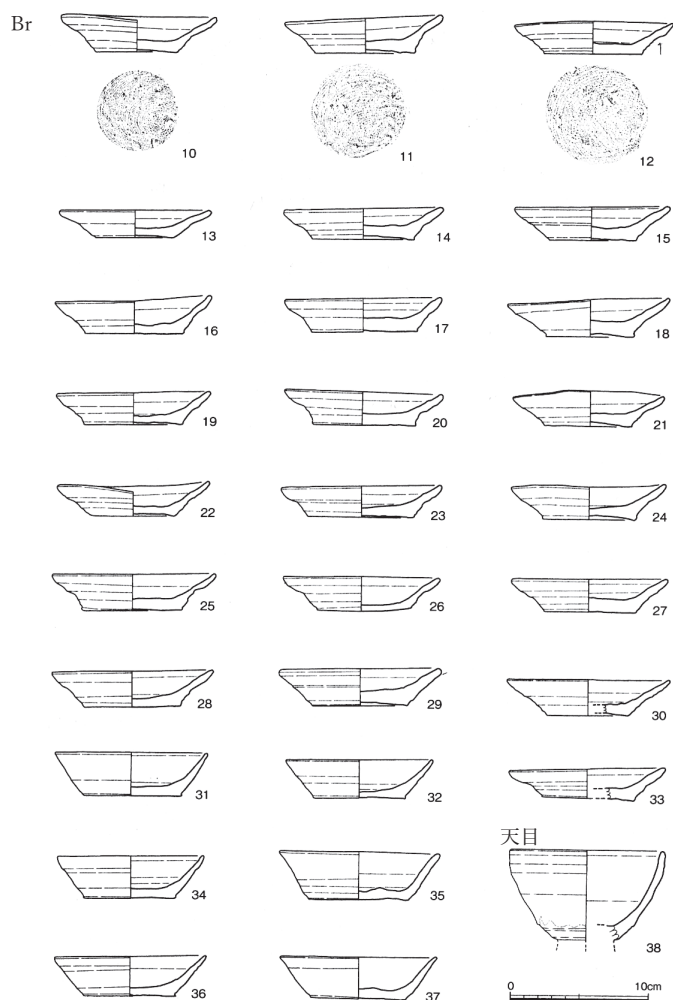
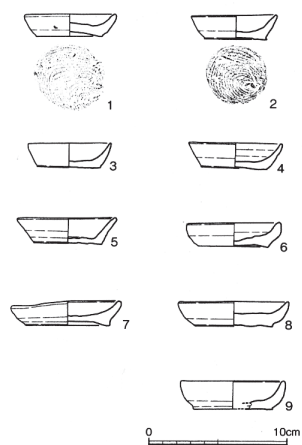


図 15 SD18 出土土師器・共伴遺物

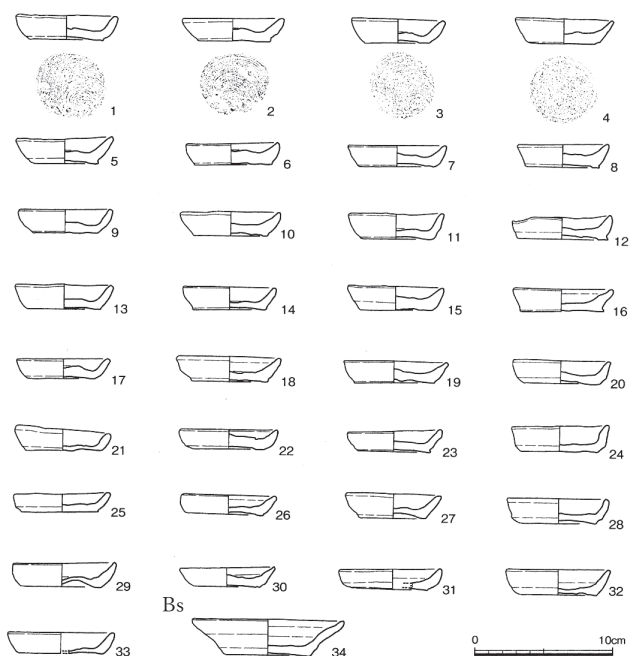


図 18 SK8 出土土師器 1

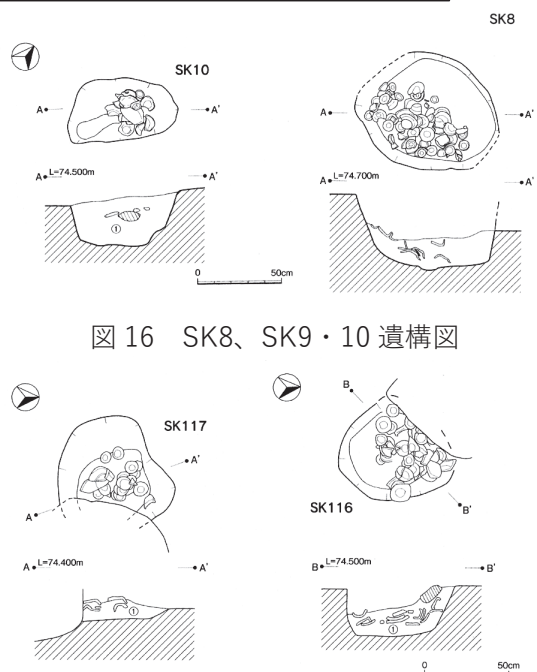


図 16 SK8、SK9・10 遺構図

図 17 SK116、SK117 遺構図

坏Bsで胎土が良質なものが多い。見込みにボタン状の盛り上がりがあるものは、ボタン部外周に沈線が廻るものがある。No.二三の特徴は坏Bsに等しいが、口径二三・四cm・底径七・五cm・器高三・七cmと通常の坏Bsより一回り大きい。極小皿の存在とあわせ、法量の差は興味深い。No.二三は、他に類例のない特殊な器形で、口径は一二・八cmを測るのに対し、底径はわずかに四・二cmに過ぎない。器壁は薄く、体部が緩やかに大きく開き、全体的に内湾気味ながら直線的に立ち上がる。総じて、ナデが丁寧である。色調は淡い桃色である。限府土井ノ外遺跡の土師器坏としては非常に特異で、他に同様の土師器は確認できていない。このため、搬入土器の可能性を考え、類例を探索したところ、プロポジションとしては山口県の大内館跡で設定されている大内II A式の坏にもっとも近似しているといえる(図二三)。ただし大内館跡の土師器皿は白色土器が多いため、色調が適合するかは不明である。あるいは、大内館跡そのものではなく周辺の町家等で用いられたタイプかもしれないが、このあたり未確認で、今後の課題である。なお、北島大輔氏の編年によれば、大内II A式は一四世紀末から一五世紀前半に該当すると設定されており、SK一一六も一応、その時期としておきたい。SK一一七からは坏はBs一点のみの出土で、年代決定に資する共伴資料は確認できていない。SK八とSK九・一〇による遺構の改変状況を見ると、SK一一六とSK一一七はほぼ同一時期の遺構と判断してよいものと思う。

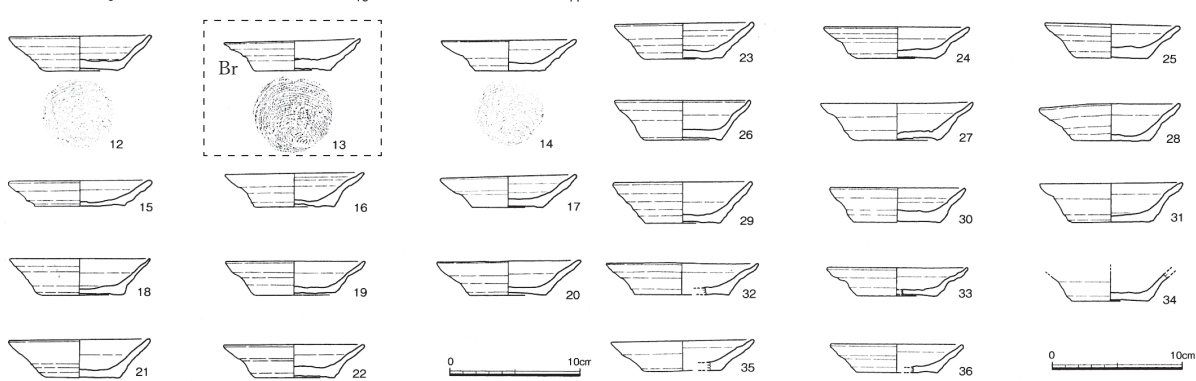
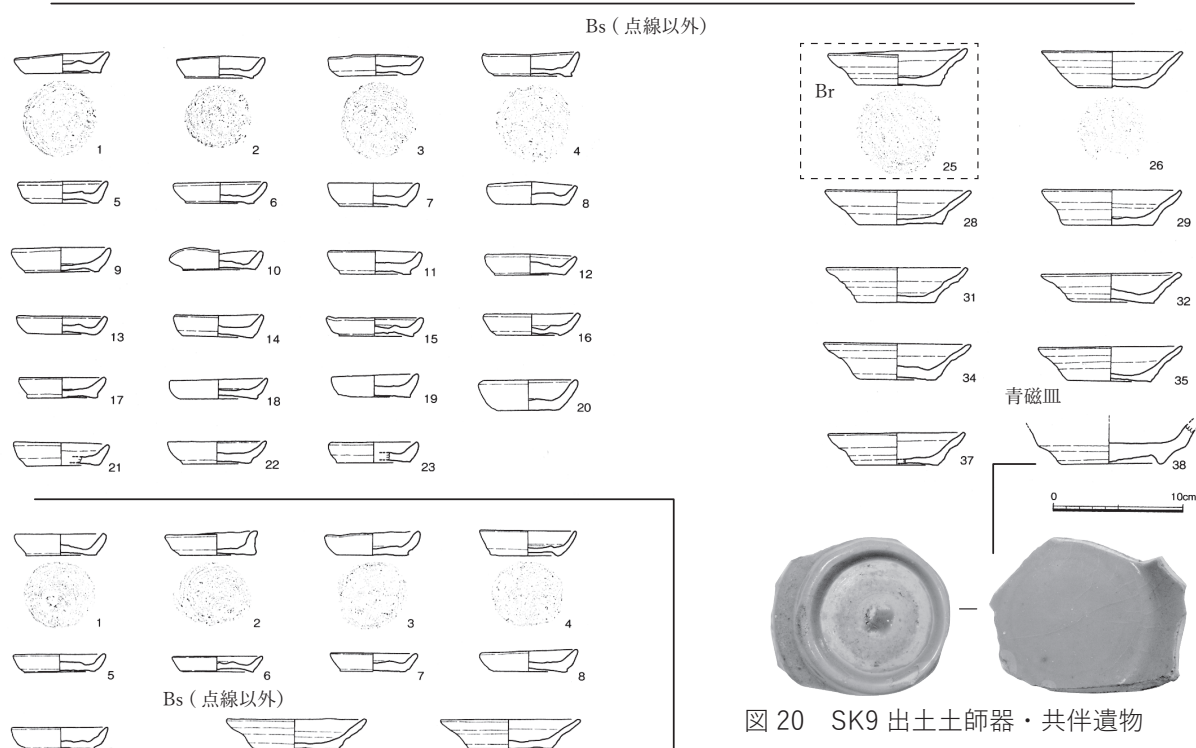
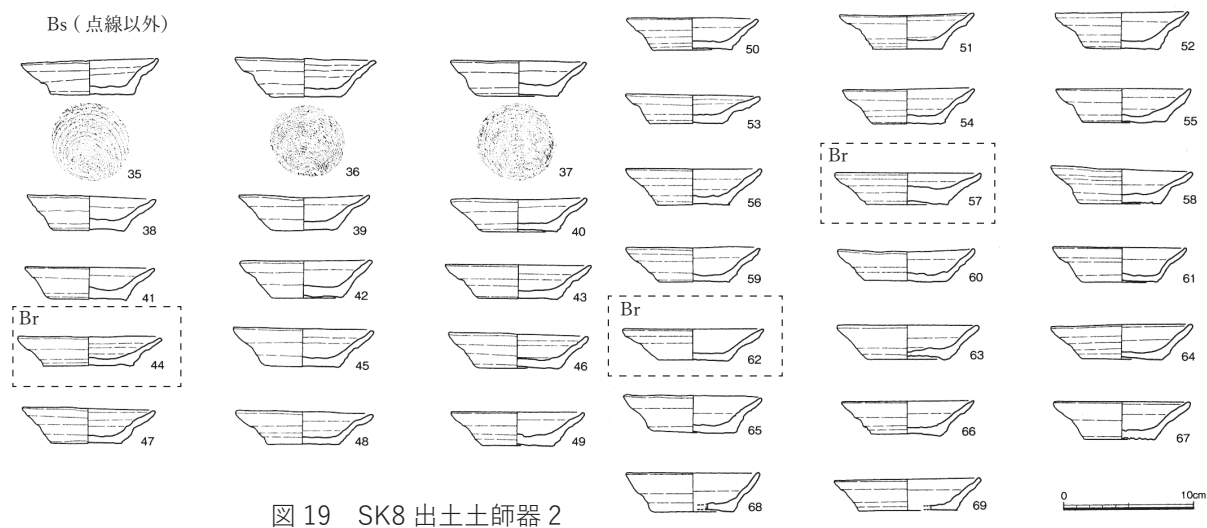
●SK五八・五九(図二五・二六)

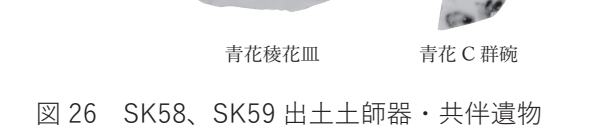
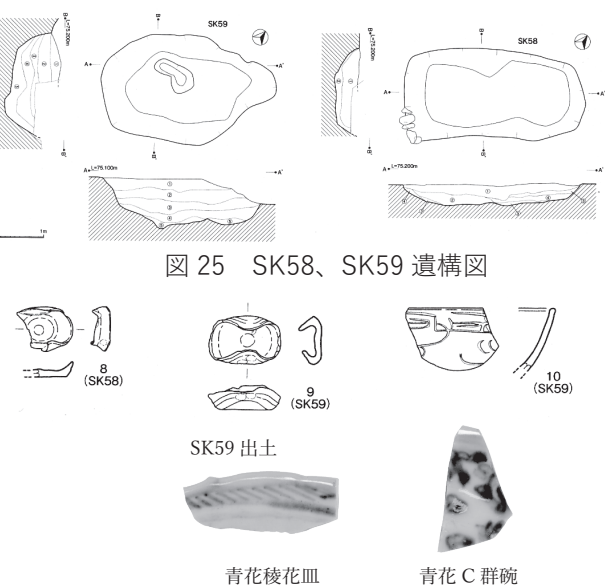
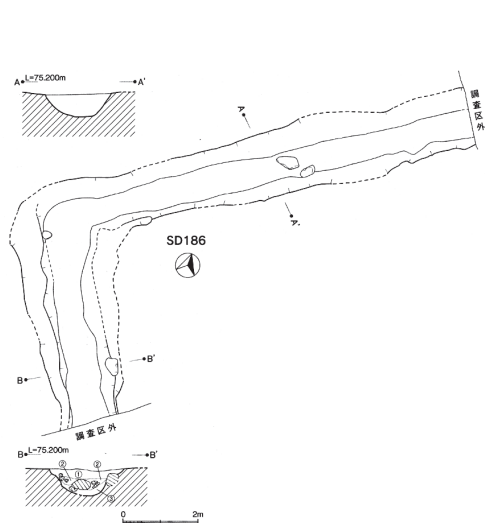
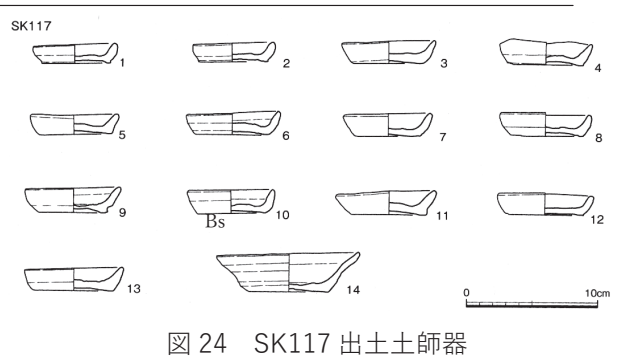
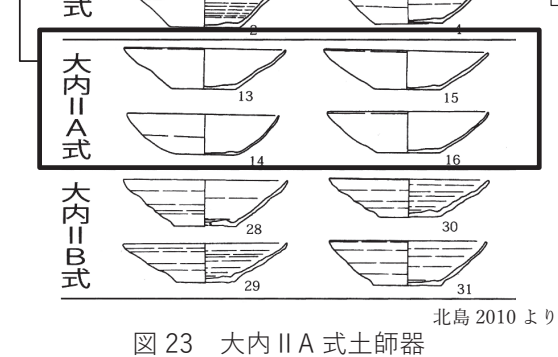
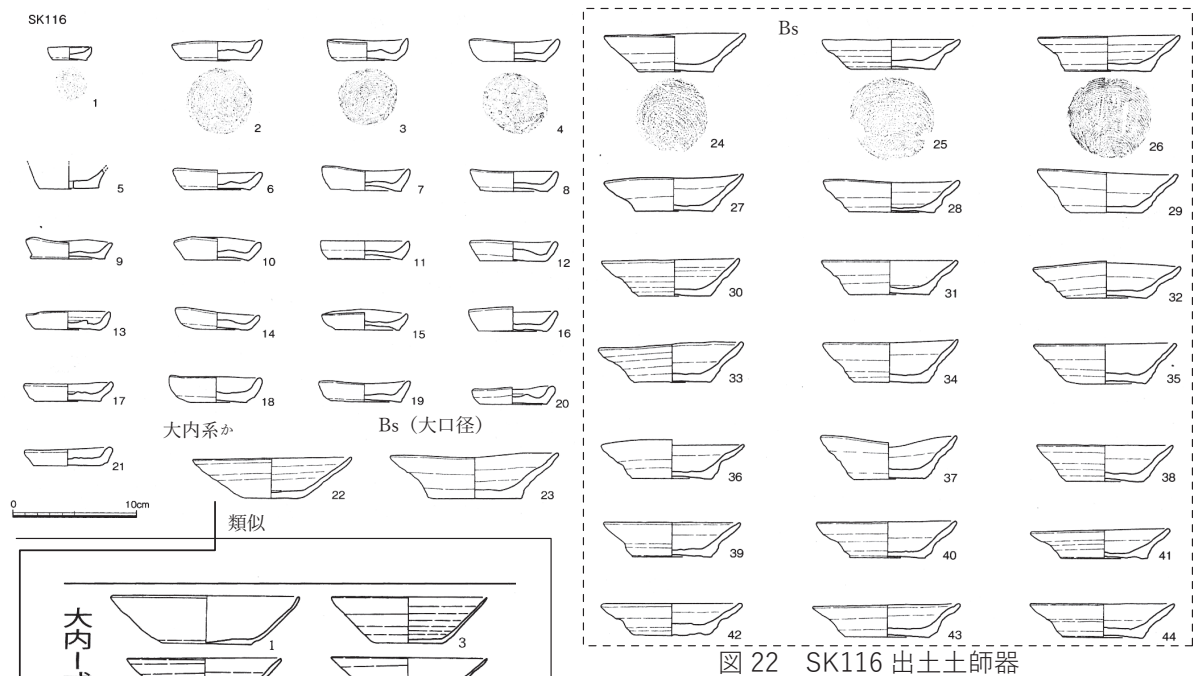
平面プランが隅丸方形の土坑。いずれも長片が東西に長く、SK五八は掘立柱建物跡SB一二の、SK五九はSB九一の南側に平行し

て検出されている。SD四・五やSD八五・一二一などとは直交する向きになる。出土土師器は少ないが、それぞれに耳皿が出土している。また、報告書ではSK五九で青磁雷文碗(V―二類)の出土も明らかにされている。未報告資料では、SK五八で白磁E群皿の高台部小片、SK五九で青花C群碗の破片(写真)が確認できた。このことからいずれも瀬戸六期(一五世紀末から一六世紀前半頃)の遺構と推定する。耳皿は体部に強いナデ痕跡が線状として残っており、SD九九の坏Bfに見られるナデに類似するように看取される。

●SD一八六(図二七・二八)

調査区二区で検出された溝遺構で、九〇度の屈曲を伴う溝である。出土土師器は、坏Bfが九点、胴部が張る坏A五点等が確認されている。輸入陶磁器では、端反青磁碗・雷文青磁碗・文様型打ちの雷文青磁碗も二点報告されている。未報告資料の確認中、SD一八六から出土した備前焼播鉢と青磁細線蓮弁文碗の破片を確認している(写真)。この備前焼播鉢は、口縁部が直立化しつつ「く」の字に内傾しつつある段階のものと考えられ、乗岡実氏の編年では、中世五b期に該当するものと考えられる(図二九)。乗岡編年では中世五b期を一五世紀末としている。この年代は、瀬戸六期に該当する青磁細線蓮弁文碗破片と矛盾はない。SD一八六は、一五世紀末頃の廃絶と推定しておく。なお、SD一八六の坏Ah群は薄手で灰黄色に近いものが多い。また、図二八―No.二四は、やや器高が高いが、器壁に荒れがあり、見込みがフラットであり、坏Brである。





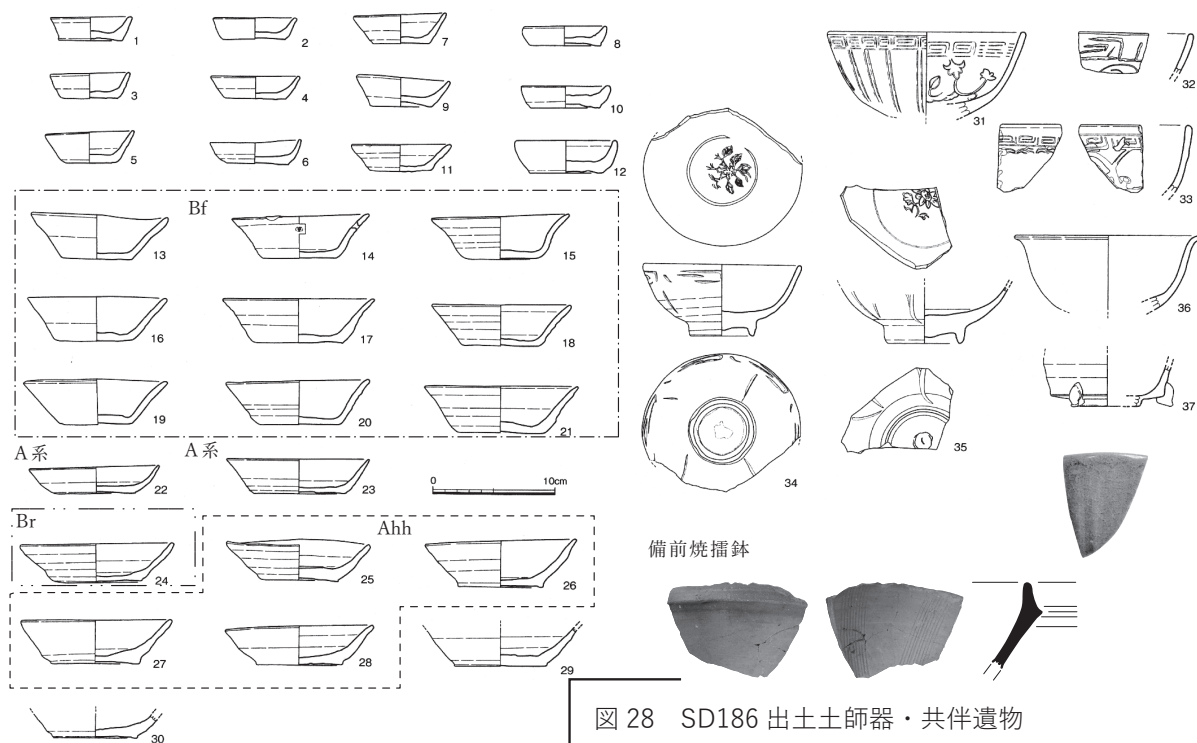
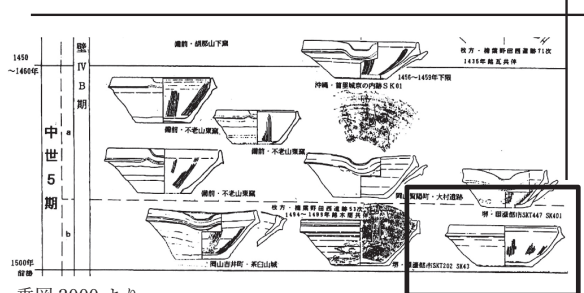


図 28 SD186 出土土師器・共伴遺物



乗岡 2000 より
図 29 備前焼播鉢編年図

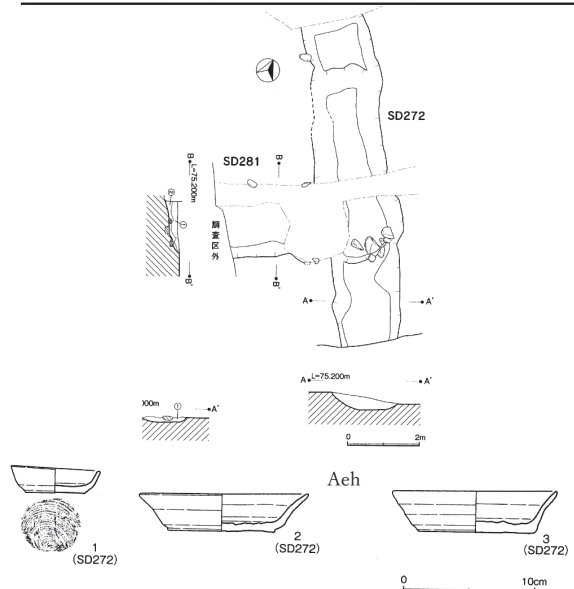


図 31 SD272 遺構図 / 出土土師器・共伴遺物

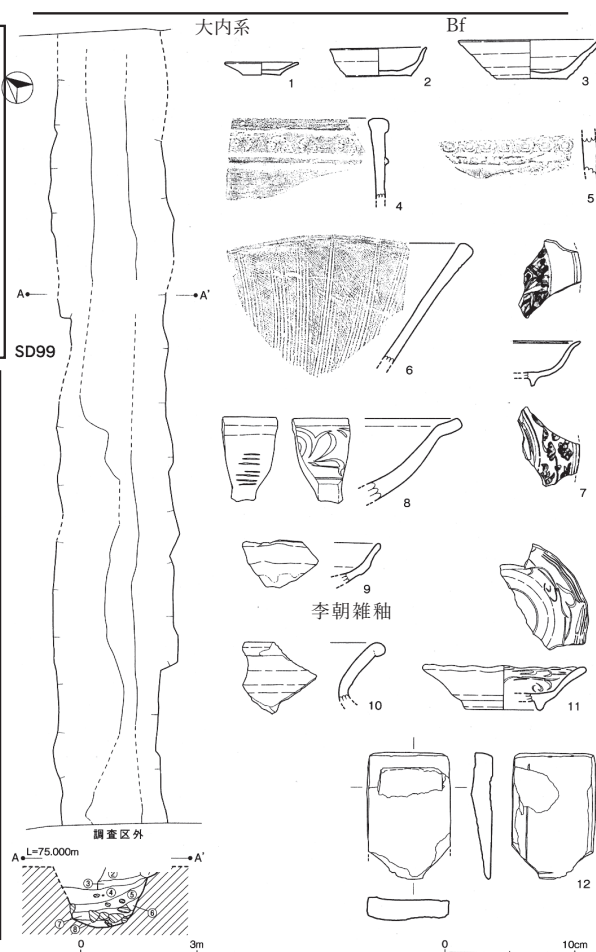


図 30 SD99 遺構図 / 出土土師器・共伴遺物

●SD九九（図三〇）

調査区二区を東西に貫く大型の溝遺構。報告書では、一区を南北に走るSD四・五と接続すると確認されており、屋敷地を区画する大溝と考えられている。

まず輸入陶磁器は青磁盤や朝鮮半島系雑釉陶器、石硯等とともに、端反の青花B一群皿、青磁VI類とされる腰折稜花皿が出土している。遺構の廃絶は瀬戸六期（一五世紀末から一六世紀前半頃）と推定される。未報告資料はこれより古い年代の破片が多い。また、この溝からは前稿で報告した茶臼が出土している。

出土土師器は少ないが、一点確認されている坏は、橙色系で外面に強いナデがある。体部は直線的に立ち上がる。見込みは盛り上がりがほとんどないが、中央部は渦巻状の回転痕跡がある。器高が低いが、坏B fに位置付けておきたい。なお、薄手で体部が開き、器高がきわめて低い小皿No.一は、類例の少ない白色系の胎土で、大内系など搬入品の可能性が高い。大内ⅢB式に実測図が類似する小皿が確認できる（北島二〇一〇）。大内ⅢB式は一五世紀末に位置付けられており、矛盾がない。

●SD二七二（図三一）

二区の北西に南北に走る溝で、延長は約7m。南側をSD九九に切られており、また中央部をSK一六二に切られる。SD九九は、SD四・五と並んで、屋敷地の基盤となる区画の大型溝であるので、かなり長期間使用されていたはずである。とすれば、SD二七二は限府土井ノ外遺跡の中でも、初期に位置付けられる遺構の可能性がある。出土した坏二点は、坏Aのバリエーションとして坏A e hと位置付

けたが、二点の法量が、それぞれ一二・八cm・八・一cm・三・〇cm、一二・五cm・八・八cm・三・三cmである。大きさからは中世前期に近いサイズで、また唯一共伴する輸入陶磁器が、華南系の青磁で兜巾状の高台の破片であり、いわゆる同安窯系青磁の可能性がある。これらの状況からはSD二七二の土師器は一四世紀以前に位置付けられる可能性がある。

（四）土師器編年の設定

ここまで見てきた溝と土器だまりの共伴遺物年代から、土師器編年を図三二のとおり設定した。重ねて言うが、年代設定に用いた資料の限界から、あくまで暫定的なもので、今後、新資料の増加と共に、全く様相が変容する可能性も十分にある。

基本的には、一四世紀代および一六世紀代の確実な遺構が確認できなかつたため、ほぼ一五世紀代の中での変遷と捉えた。

在来系土師器である坏A類は、類似する器形が散見される大友氏館跡のA系統土器を参考にすべきだが、長直信氏が「一四・一五世紀の坏Aの形態は極めて多様性に富み」、「A期中頃と後半の土器群の時期区分については、改めて検討が必要」と指摘している（長二〇一五）。限府土井ノ外遺跡の坏A類でも、連続性などの把握に至らなかつたため、本稿では坏B類を主体として設定した。

未報告資料も含めて、土師器の破片は大多数を通覧したが、手づくね生産による、いわゆる「京都系土師器」は見いだせなかった。これは、限府土井ノ外遺跡では、大内氏や大友氏で京都系土師器を導入した時期に該当する一五〇〇年以降の確実な遺構が無いこと、あるいは菊池氏が京都系土師器の導入に積極的でなかつたこと、などの



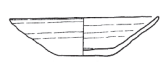
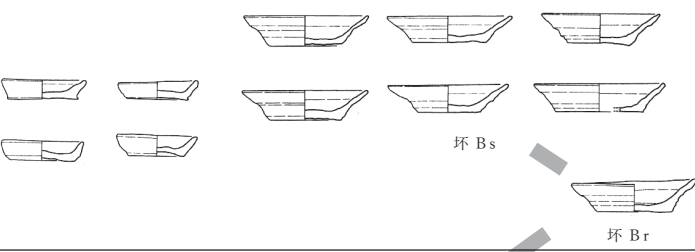
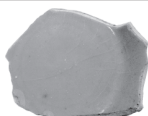
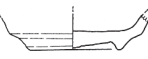

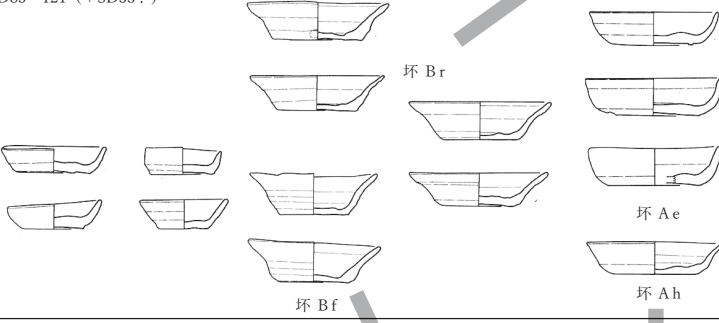






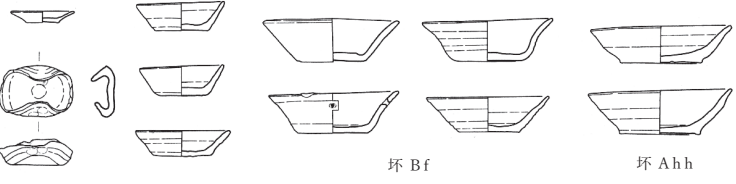
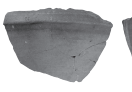
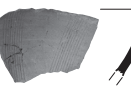

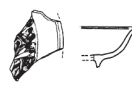


	土師器	共伴遺物
一四世紀	SD272  坏 Aeh	
一四世紀末 一五世紀第一四半期	SK116・117  坏 Bs	
一五世紀第二四半期	SK8～10・SD18  坏 Bs 坏 Br	  
一五世紀第三四半期	SD85・121 (+SD33?)  坏 Br 坏 Ae 坏 Ah 坏 Bf	     
一五世紀第四四半期 一六世紀初頭	SD99・186・SX58・59  坏 Bf 坏 Ahh	     

図 32 限府土井ノ外遺跡土師器編年案

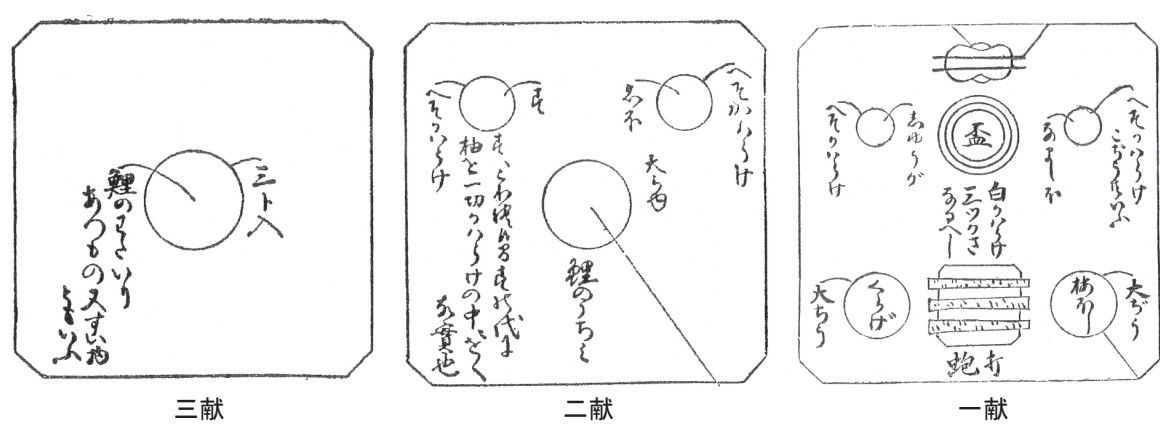


図 33 『宗五大艸紙』に見る式三献の配膳図

理由が考えられるが、あくまで想像の範疇である。輸入陶磁器には一六世紀代の遺物がいくらか確認できたとは言え、当該期の遺構の存在が全く不明であり、また一六世紀代に設定できる土師器の形式が見出せなかったことは、主殿・会所の機能が別の空間に移転したことを想起させる。一六世紀に入ると、文亀元年（一五〇一）の菊池能運の島原亡命から、阿蘇武経や大友重治らの相次ぐ家督継承など変転する中で、豪華な青磁唐物のデイスプレイや饗応による多量の土師器消費などで殷賑を極めた限府土井ノ外遺跡も、政治中枢としての機能を喪失した可能性がある。

三 文献史料からみる土師器使用

（一）武家儀礼・饗宴と土師器

土師器の皿や坏は、戦国期の武家儀礼に主に用いられていたことが、さまざまな故実書から明らかである（脇田一九九七）。全国の守護居館遺跡、もしくはそれに準ずる遺跡でよく見られる土師器の大量出土、とりわけ一括廃棄遺構の存在は、この故実書の内容を裏付けている。居館の主殿で催される君臣の身分確認儀礼「式三献」から、それに続く会所での饗応・酒宴に至るまで、一連の儀礼にあつては、酒の器としても肴の皿としても、主に土師器皿坏が使用されており（図三三三）、その使用実態は、特に朝倉氏や三好氏などの大名屋敷への將軍御成時に詳細が記録されており、把握することが可能である（埴二〇二三）。守護居館は、幕府の御所空間をモデルとして、建物の配置や機能を寄せた造りになっており、また、そこで行われる儀礼・

行事もセットで模倣、ハード・ソフトひっくるめて空間ごと導入を図っているケースが多い。これにより武家棟梁の権威を自地域に重ね、領国経営を正当化する依り代としたのである。

破損や汚れの付着などにより役割を終えた土師器は、居館内もしくはその周辺の土坑などにまとめて廃棄され、これが土器だまりとして発掘調査により検出されることになる。

このような場において、土師器が盛んに用いられた背景として、かつては「一度きりの使用で処分し、清浄さを強調した」と考えられてきたが（藤原一九九七）、酒がしみた時に交換する給仕作法や肴を載せる際に「かいしき（搔敷）」を敷いて載せることが『酌并記』等に記されていることから、中井淳史氏はある程度の回数を使用したうえで廃棄された可能性が高いことを指摘している（中井二〇一一）。このため、可能な限りは繰り返し使用がなされたものとも認められる。とはいえ、日常の飲食器を担った漆器、中国陶磁器や瀬戸美濃系陶器等の什器に比べれば、その寿命は著しく短く、せいぜい数回の利用で汚損し、その都度、新しく補充されたものと考えられる。

先にいささか触れたが、將軍家の御座所があつた京洛では、京都系土師器と呼ばれる手づくね土師器が出土するが、一六世紀頃になると大内氏館跡や大友氏館跡でもこれを模倣した非ロクロ成形の土師器が導入されており、室町幕府に近い関係にあつた両氏が將軍家に由来する武家儀礼を自家でも実践することで、幕府の権威に接近したものと評価されている。京都系土師器の生産・消費の開始時期は、両遺跡の土師器編年から、大内氏では一五一〇年前後、大友氏では一五三〇年頃と想定され、二〇年ほどのタイムラグを以て大内氏が

先行していると考えられている（長二〇一八）。法量の細分化と共に、式三献などの儀礼を少しでも將軍家のスタイルに寄せ、その権威を再生産しようとしたものと捉えられる。

式三献に関する文献史料を確認した小野貴史氏は、大内氏に関して、大内政弘が伊勢貞藤から作法を教示された『御成次第故実』、永正六年（一五〇九）に、大内義興がやはり伊勢氏から礼法故実の指南を受けた『大内問答』の存在を挙げる。また、大友氏に関しては、同じく永正六年に大館氏から伝えられた『殿中年中行事』と大永三年（一五二四）に小笠原光清から伝えられた『小笠原光清秘聞書条々』の入手を例示する（小野二〇〇一）。概ね一五世紀末から一六世紀前第一四半期におさまり、なお、大内氏が太友氏より先行する流れは、両氏の京都系土師器の導入と大きく齟齬は無いように思われる。

これに対して、限府土井ノ外遺跡では、今回確認した限りでは、京都系土師器の出土は確認できず、出土土師器のほぼすべてが回転台土師器で占められていた。ここまで見てきたように、土井ノ外遺跡では一六世紀の遺構は皆無であるので、京都系土師器の導入前に居館が終焉を迎えた可能性が示唆されるが、菊池氏側からの足利幕府に対する距離感についても視野に入れ、今後、検討を重ねなければならぬ。

（二）絵巻に表現された土師器

次に、中世に描かれた絵画資料から、土師器使用の様子について確認しておきたい。

図三四は、『前九年合戦絵巻』（写本）の酒宴場面である。絵巻自体は一一世紀中葉の陸奥守源頼義と安倍氏との合戦を描いたもので、

絵巻の成立は一二世紀末頃とされている。「將軍」と記される頼義を中心に、子息義家や大宅光房、藤原景通など主従が車座になって飲食に興じている場面を描くが、正面感で確認できる頼義・義家・光任らの膳を見ると、食器・酒器共に土師器皿が利用されており、また箸置も土師器皿と思われる。頼義の膳は、肴と箸が足付の膳、酒の膳は足の無いものとなっている。義家の膳は足付だが、膳はひとつのみしか配置されていない。光任もまた単膳で、こちらは足の無い膳のみである。ここからは、主従のヒエラルキーが膳の数と足の有無で表現されており、飲食器がいずれも土師器であることが理解できる。頼義の対面には、酒容器を持った小姓が控えている。

この絵巻の姿は一二世紀の姿というよりも、一二世紀末の食膳状況を適用させた可能性も十分に考えられる。

図三五は『慕婦絵詞』（写本）に見られる食事及び調理の風景。『慕婦絵詞』は、西本願寺三世の覚如上人の伝記を絵巻としたもので、室町時代初期にあたる正平六年・観応二年（一三五二）の作とされる。僧の前に置かれた二膳はそれぞれ足付の大小があり、奥側の膳には料理が盛られ、箸置の上に箸が置かれる。土師器皿には大中小の法量差が確認できる。手前の膳は土師器が二点配される。いずれも、膳の器は土師器のみで構成されている。対面する客人の膳は全景が窺えないものの、やはり土師器が確認できる。台所から従僧が対面の間へと、足付折敷を運んでおり、その膳には肴が盛られた土師器が三点載る。台所では四名の僧侶が調理に励んでいる模様が描かれ、料理を盛る鉢・大皿類は、黒色と緑色のものが確認できるので、これは青磁と漆器なのであろう。液体を入れる壺類も青磁である。調理している僧たちの奥には、配膳済の折敷類が三セット用意さ

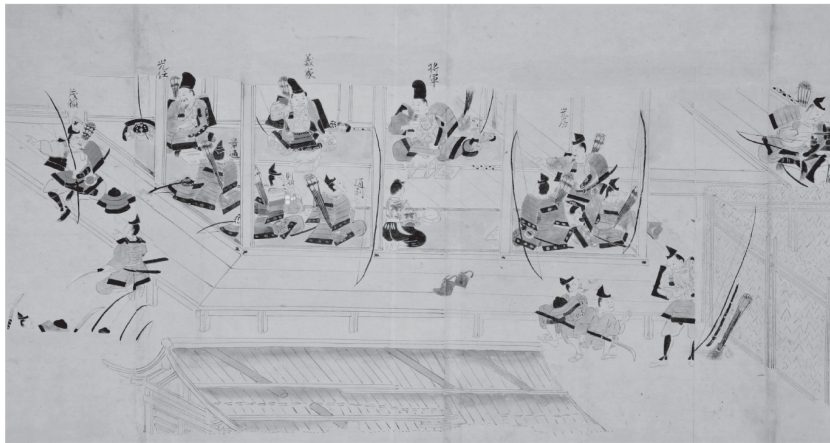


図 34 『前九年絵巻』の飲食風景

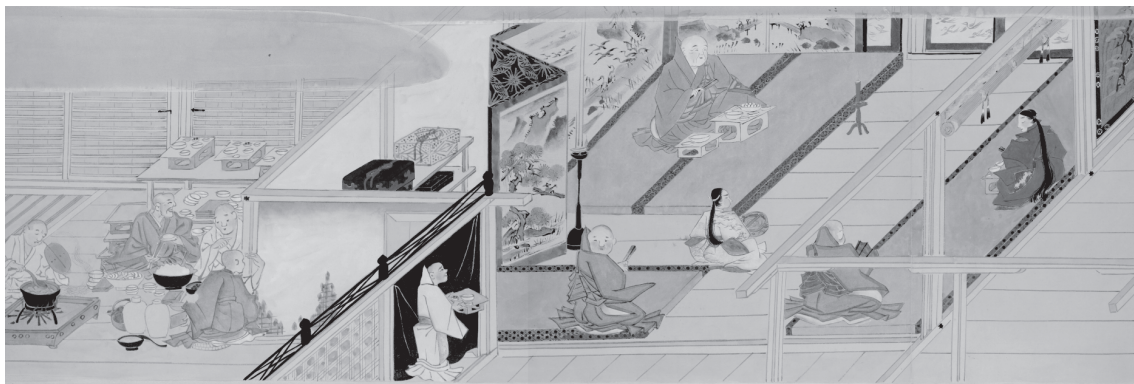
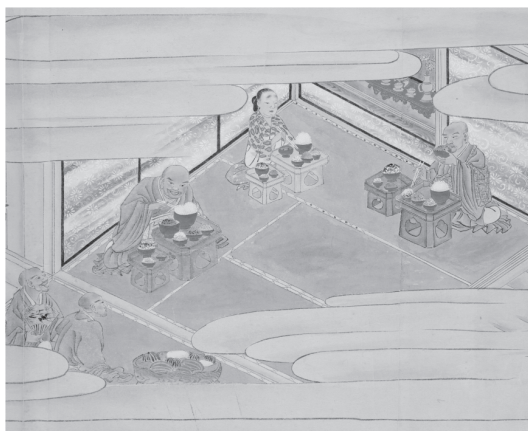
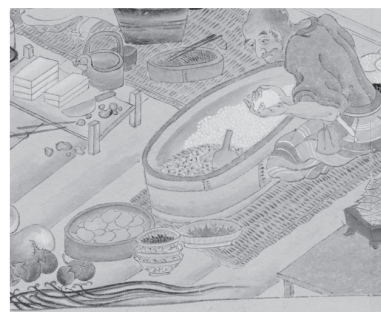


図 35 『慕帰絵詞』の飲食風景



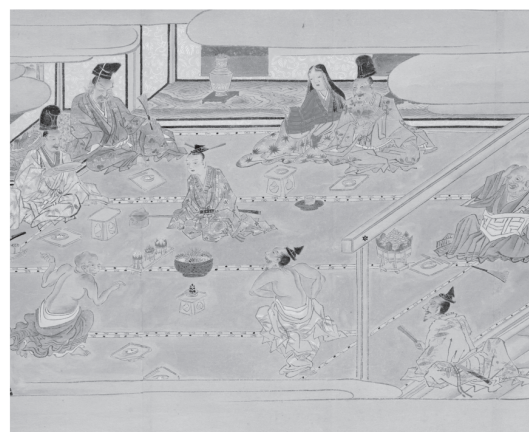
2 飯好きの人々



1 青花皿



4 飯・酒両方を嗜む人々



3 酒好きの人々

図 36 『酒飯論絵巻』の飲食風景

れており、いずれも土師器に盛られている。箸の中央にはやはり土師器小皿を使った箸置が置かれている。周囲には重ねられた土師器類が乱雑に積まれ、一つ一つの皿に料理をよそっている最中であることが理解できる。武家ではなく寺院の様子であるが、やはり食器の主体を土師器類が担っていることが理解できる表現である。

図三六の各絵は、それぞれ『酒飯論絵巻』に描かれた飲食の様子である。下戸で飯好きの僧、酒好きの公家、両方を嗜む武家の三者が対比されて描かれ、三者の主張が、実際は仏教宗派のあり方をなぞらえたものと考えられている（三瓶二〇〇八）。成立は一六世紀中葉とされており、それ以前の絵巻で描かれることの少なかった中国青花皿の表現が確認できることから（図三六一一）、一五世紀後半以降の青花の普及という時代背景と整合している点が興味深い。

三者の膳に使用された飲食器もそれぞれに対比的で、図三六一二の「飯好きの人々」は、それぞれに足付折敷二膳を前にし、いずれも赤漆の食器に飯・肴が山盛りに盛られた描写になっている。これに対し、図三六一三の「酒好きの人々」は、赤ら顔で酩酊の只中という様相だが、食器類は質素で、足付もしくは平置の折敷に、それぞれ土師器一皿分のつまみが載っているだけの状況である。左手の武家は、明らかに食べ物の土師器より二回りほど大きな土師器大盃で、酒をおおっている。座には青磁香炉が置かれ、部屋の棚部には、青磁の花生、鉢が調度品として飾つてある。図三六一四の「酒・飯両方を嗜む人々」は、各々の前に三つの膳が配され、やや低めの四方足付の折敷二膳と平置折敷一膳の組み合わせになっている。料理・食器とも多彩で、赤漆の汁椀と青磁の皿類が主に用いられている。座の中央には、おそらく酒器である土師器が一点のみ置かれ、柄付の酒容器を手にした侍

女が気を配っている。奥の棚には、軸物と青磁の花生が飾られる。

『前九年合戦絵巻』『慕婦絵詞』では、膳に使用された飲食器がすべて土師器であるのに対し、『酒飯論絵巻』では、食器類のバリエーションが豊富で、漆器・磁器類の使用もわかる。これらは時代による差もあるだろうが、それ以上に、中世では空間のあり方や違いによって、飲食器の使い分けが行われていたことを示唆しているものと捉える方が的確であろう。

（三）式三献・酒宴の実

室町時代の武家儀礼は、まず主殿での式三献から始まり、その後、会所に場所を替え、夜を徹して酒宴を行うというのが通例であったようだ。酔いが回ると、まさに『酒飯論絵巻』に描かれた「酒好きの人々」のような饗宴が展開されていたのであろう。

將軍の御成の栄に浴した大名たちは、こぞって豪華なもてなしを競い、永禄三年（一五六〇）に足利義輝を迎えた三好義長は十七献、永禄十一年（一五六八）に足利義昭を迎えた朝倉義景も同じく十七献、明応九年（一五〇〇）に足利義植を山口に迎えた大内義興に至っては『明応九年三月五日將軍御成雑掌注文』から二十五献以上の肴と酒を供した記録が残っている（江後二〇二一）。単に飲食を重ねるだけではなく、合間合間には、双方からの進物の応酬、御馬御覧、能の観劇等が催されていた。かような様々な趣向を実施するに恥ずかしくない舞台装置が、守護館であったと言えよう。

さて、ここでは永禄十一年に、石見の益田藤兼・元祥親子が、毛利元就を饗応した「益田藤兼・同元祥安芸吉田一献手組注文」（東大史編二〇〇三）から饗応の内容について見てみよう。藤兼は、元就

との関係強化を図るため、次子次郎の元服に際し、元就から一文字拝領を受け「元祥」と名乗らせた。そして貴重な品々の献上と祝宴の主催を行ったのである。この祝宴に関する料理の献立が当該文書に記録されている。

宴の最初は「御引渡」と記されている。これは具体的な料理内容が述べられていないが、式三献のことであろう。『宗五大艸紙』では式三献の膳内容を図指する中で、「此うちあわはびをひきわたりと云」と述べている（塙二〇一三）。武家の式三献では、「敵に打ち勝ち、喜ぶ」の語呂合わせから、「打鮑」「勝栗」「昆布」を並べることが通例で、「梅干し」「海月」に替わる場合もあった（二木一九九九）。『宗五大艸紙』の図では、白かわらけ三点、へそかわらけ二点、大中二点、みみかわらけ（耳皿）一点が並べられており、初献だけで八点の土師器が利用されている（図三三）。

郡山饗宴では、次に、「御湯漬」として、鹽引・覆面鯛・貝鮑・酒浸（さかひて）・香の物・はむ（はんぺん）・蒲鉾が出されている。同年の朝倉邸への義昭御成の場合は、式三献後に、会所へ移動して、三膳ほど飲食をしてから湯漬に至っており、饗宴により膳の順序や献数には差があった。

湯漬二献目は鮓・雉・螺貝・汁（集煮）・烏賊・鮭。三献目は鯿子（かどのこ）・海鼠腸（このわた）・汁（羹・かわうそ）・海月が供されている。その後、箸休めも兼ねたのであろう、御菓子七種が出されている（内容是不明）。再び膳に戻り「御肴」として、小串・雑煮・削り物（鮑などを小さく削った物）が記されている。二献目として「むしむき」に白鳥を添えたものが出され、三献目はさしくらげ・鯛・こうるか（子鰐鯪？）であった。四献目は鳥の足・鼈羹・刺身、五献目は塩ひき・

雉・烏賊、六献目は草片・鰻頭・「はるも」と続く。終いにはん（はんぺん）・鮎・からすみが七献目として出され、献立が終わっている。地方領主が大名を饗応した例のためか、膳の数からすると將軍御成に比べ控えめではあるが、それにしても海から遠い吉田郡山城にあって、あらゆる山海の珍味を手を尽くして準備したことが読み取れる。石見益田から運んだ物も多くあったのであろう。

益田元兼の饗応で興味深い点は、準備物を記したものの記録が残っていることで、特に「御かわらけの物三せん」という文言が注目に値する。一回の饗応に三千点の土師器が用意されていた事実を物語るこの記述は、居館遺跡における大量の土師器出土に対し、一定の裏付けを与えてくれるものであろう。ここに記した肴の合計は四十四種を数えるが、御引渡の肴数は明記されておらず、また酒の盃も相当数が必要としたであろうことは想像に難くない。四十四にこれらを適当に加え、ひとりあたり七〇枚の土師器を使用したと仮定すると、三千枚の土師器で四〇名ほどがまかなえる計算になる。少なくとも一五・一六世紀頃においては、廃棄土師器の数量と、その空間における武家儀礼の頻度は比例するものと考えて大過はないと思われる。

（四）耳皿について

すでに少し触れたが、式三献や饗宴における膳の配置法について言及した各種の故実書、例えば『奉公覺悟之事』『宗五大艸紙』（塙二〇一三）や『山内料理書』（倉林一九八五）等において、箸置は「みみかわらけ」と記されている。「みみかわらけ」は無論、「耳皿」のことであり、土師器の小皿の両端を折り曲げ、箸置として妥当な形状にあつらえた土師器である。大内氏館跡、大友氏館跡、いずれの

土師器編年にも組み込まれていることが、編年図からわかるので（北島二〇一〇・長二〇一八）、守護館であったことが確実な両遺跡から一定量出土していることが理解されよう。熊本県内では山都町浜の館跡の出土遺物に耳皿を一点確認している（未報告）。浜の館跡は戦国期の阿蘇大宮司居館跡である。

限府土井ノ外遺跡の出土例としては、管見の限り、先述のSK五八・五九の二点のみであった。全ての土師器破片を確認できたわけではないものの、未報告資料も含め、大部分は通覧したので、仮に未見資料に耳皿が含まれているにせよ、劇的に数が増えるものではない。このことから、耳皿は極めて出土数の少ない希少器種と推測される。これについては『山内料理書』の次の記述が参考になる。

一 はし台はみゝかわらけをく事大名さまの外あるへからす。みゝかわらけのうへに紙かいしきのやうにかみををく。

箸台としての「みみかわらけ」は大名以外には使用してはならない、とのしきたりがあったようである。『山内料理書』は明和六年（一四九六年）にはすでに成立しており、料理内容を相伝した山内三郎左衛門尉は管領斯波氏の家中にあったことから、幕府中枢で適用されていたしきたりとみて問題ない。考古学では「無いことの証明」は非常に困難であるが、限府土井ノ外遺跡での、全体の土師器出土量（おそらく破片数としては一万点前後）における、二点という出土例の少なさは、必ずしも大名とは限らないが、耳皿が貴人向けにのみ限定されて供されていた可能性と矛盾しないものと言える。

それぞれ一点ずつ耳皿が出土したSK五八・五九は、いずれも主要

建物（SB一二・同九一）に南接する隅丸方形の土坑で、規格性が高く建物に付随する遺構とみられる（図七）。共存遺物は、すでに述べたように少なく、わずかに青磁雷文碗の破片（報告書掲載）、青花C群皿・白磁E群皿の小破片（未報告）がある程度である。式三献に類する献盃儀礼もしくは饗宴の膳において、貴人が使用した箸置が廃棄されたものの可能性があり、土師器資料の中でも注目に値する資料である。

ただし、肥前では、島原半島の有馬氏の居城であった日野江城跡で大量の土師器皿・坏の報告の中に約四〇点もの耳皿が見られ、まとまった量の耳皿出土が確認されている（南島原市二〇一一）。この事例からは、耳皿の貴人向け限定が絶対的なもの、とは断言できない。地域差や時期差により、その価値感は大きく異なっていたのかもしれない。

おわりに

本稿ではまず限府土井ノ外遺跡から出土した輸入陶磁器の破片点数のカウントと分類から、遺跡の存続時期について言及した。日常に利用された碗皿類の出土数から、精緻な陶磁器編年が設定されつつある沖縄編年にあてはめて、遺跡の存続年代を再検討した結果、調査報告書で示された一四世紀後半～一五世紀前半という遺跡の年代観に大きく修正を迫ることとなり、一四世紀後半～一六世紀後半まで継続していたこと、中でも遺跡としてのピークは一五世紀中葉から後半にあったことを示した。

次に、大量に出土した土師器について、器形から個別分類を設定し、そのうち坏B群の形態変化を追うことで、主に一五世紀代の土師器の変遷案を提示した。不十分な面も多いが、これまで全く提示されることのなかった熊本県下での中世後期の土師器編年に一定の道筋を示すことができた。

また、出土した土師器類の用途について、故実書や絵巻の事例などを引用し、式三献や会所での宴会に利用されたものである可能性を示した。特に益田元兼と毛利元就の饗宴で、多数の料理が供され、その際に土師器皿三千枚が発注されていることに着目し、地方大名のひとつの饗宴においてどの程度の土師器が利用されたかの裏付けと考えた。また、箸置としての耳皿の希少性にも言及し、SK五八・五九における耳皿の出土と関連付けた。

土師器の大量出土は、必ずしも、儀礼的空間にのみ限られたものではなく、各地の都市遺跡や小領主の城館などでも散見されるものである。しかし、隈府土井ノ外遺跡に関しては、前提として、全国的に見ても相当の優品たる青磁唐物を備えた空間が一区周辺に存在したことが重要で、このような会所や主殿と思われる建物が配置されていた空間構成の中において、多数の土師器の消費があった点は、まず式三献や宴会の痕跡と見てよいのではないだろうか。輸入陶磁器の出土状況から、隈府土井ノ外遺跡を会所等が存在した空間とみなした点については、前稿（中山二〇二二A）を参照されたい。

前稿と本稿により、概ね隈府土井ノ外遺跡について出土遺物を通した究明は、一定の役割を果たせたと思っている。しかし、発掘調査の限定的な範囲から、居館跡の全体像、とりわけ各建物遺構の性格やその他遺構の配置状況、土塁・堀等で区画された居館範囲等はベール

に包まれたままである。今後、遺構面からも隈府土井ノ外遺跡の研究が進むことを期待したい。また、さらに広範に、中世守護都市「隈府」の各地において、発掘調査の成果による新知見を得て、よりクリアに中世守護都市「隈府」像が構築されることも切望するものである。

註

一 IV類・IV類・V―I類の青磁碗は、いずれも体部無文の端反タイプであり、口縁部の形状で同定を行う。このうち、IV類は口縁端部が尖り気味で薄釉で、V―I類は玉縁状の端部で釉層も厚くなると特徴が捉えられている。ただし、実際に小破片で見ると、その判断に迷うものが多くあり、このため、判断に迷ったものはIV―V―I類の範疇で同定不可、として表に反映した。

挿図・表出典

- 図一 右＝筆者作成 左＝open street mapを使用
- 図二 熊本県教育委員会二〇〇九
- 図三 長二〇一A
- 図四 長二〇一五
- 図五 長二〇一八
- 図六～九 熊本県教育委員会二〇〇九の実測図を元に筆者作成
- 図一〇 沖縄県立埋蔵文化財センター二〇〇一
- 図一一・一二 熊本県教育委員会二〇〇九
- 図一三 熊本県教育委員会二〇〇九の実測図を元に筆者作成
- 図一四 熊本県教育委員会二〇〇九
- 図一五 熊本県教育委員会二〇〇九の実測図を元に筆者作成
- 図一六～一八 熊本県教育委員会二〇〇九
- 図一九～二二 熊本県教育委員会二〇〇九の実測図を元に筆者作成
- 図二三 北島二〇一〇の実測図を元に筆者作成
- 図二四・二五 熊本県教育委員会二〇〇九
- 図二六 熊本県教育委員会二〇〇九の実測図を元に筆者作成
- 図二七 熊本県教育委員会二〇〇九
- 図二八 熊本県教育委員会二〇〇九の実測図を元に筆者作成
- 図二九 乗岡二〇〇〇の実測図を元に筆者作成
- 図三〇・三一 熊本県教育委員会二〇〇九の実測図を元に筆者作成
- 図三二 筆者作成
- 図三三 塙二〇一二
- 図三四 国立国会図書館デジタルコレクション『前九年絵巻物』巻一
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2573531?tocOpened=1>

- 図三五 国立国会図書館デジタルコレクション『幕歸繪々詞』巻二
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2590849?tocOpened=1>
- 図三六 国立国会図書館デジタルコレクション『酒飯論』
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2542602>
- 表一・二・三 筆者作成
- 引用・参考文献
- 青木勝士一九九六「肥後菊池氏の守護町「限府」の成立」『熊本史学』七二・七三合併号 熊本史学会
- 青木勝士二〇二〇「菊池氏の拠点 北宮・限府」『九州の中世Ⅱ 武士の拠点 鎌倉・室町時代』高志書院
- 五十川雄也二〇一九「大内館と大友館」『室町戦国日本の覇者 大内氏の世界をさぐる』勉誠出版
- 江後迪子二〇二一「大内氏遺跡での宴料理等「歴食」再現と地域性」『歴史的脈絡に因む遺跡の活用―儀式・行事の再現と地域間交流の再構築― 令和二年度 遺跡整備・活用研究集会』奈良文化財研究所
- 大分市教育委員会二〇一五『大友氏館跡一』
- 沖縄県教育委員会一九九八『首里城跡 ―京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）―』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター二〇〇五『首里城跡―二階殿地区発掘調査報告書―』
- 小野貴史二〇〇一「大友氏における「式三献」について」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会
- 小野正敏一九九七『戦国城下町の考古学』講談社
- 小野正敏二〇〇三「威信財としての貿易陶磁と場―戦国期東国を例に―」『戦国時代の考古学』高志書院
- 小野正敏・五味文彦・萩原三雄編二〇〇八『考古学と中世史研究Ⅴ 宴の中世―場・

かわらけ・権力―高志書院

鹿児島県維新史料編さん所一九七九『鹿児島県史料 旧記雑録前編二』鹿児島県
亀井明德編二〇〇二『明代前半陶磁器の研究 ―首里城京の内SKO―出土品―』

菊池市教育委員会二〇二〇『中世菊池一族関連遺跡群確認調査概要報告書「菊之城
跡」「守山城跡及び内裏尾」「隈府城下遺跡」』

北島大輔二〇一〇「IX章 大内氏の設定―中世山口における遺物編年の細分と再編」
『大内氏館跡XI』山口市教育委員会

北島大輔二〇一九「大内氏の宴―その器と配膳方法―」『室町戦国日本の覇者 大
内氏の世界をさぐる』勉誠出版

熊本県教育委員会二〇〇九『熊本県文化財調査報告第二四八集 隈府土井ノ外遺跡』

熊本県立美術館二〇一九『日本遺産認定記念 菊池川二千年の歴史 菊池一族の戦
いと信仰』菊池川二千年の歴史展実行委員会

熊本市教育委員会二〇一四『二本木遺跡群二三』

楠瀬慶太二〇〇七A「土師器食膳具から見た中世博多の土器様相―博多遺跡群の土
師器編年―」『九州考古学』第八二号 九州考古学会

楠瀬慶太二〇〇七B「戦国期島津氏における酒食饗応儀礼 ―式三献とかわらけ―」

『比較社会文化研究』第二二号 九州大学大学院比較社会文化研究科

久米島町教育委員会二〇〇八『宇江城城跡発掘調査報告書I』

倉林政次一九八五『日本料理秘伝集成 第一八巻 日本料理の起源 食物・食事維
篇』同朋舎出版

三瓶はるみ二〇〇八「日中の酒にまつわる論争について ―「酒飯論」を中心に―」『大
学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」活動
報告書』お茶の水女子大学大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際
的情報伝達スキルの育成」事務局

柴田圭子二〇一一「第一章 今帰仁城跡出土明代青花瓷の研究」『今帰仁城跡発掘

調査報告V』今帰仁村教育委員会

鈴木康之二〇〇二「中世土器の象徴性―「かりそめ」の器としてのかわらけ―」『日
本考古学』第一四号

瀬戸哲也・仁王浩司ほか二〇〇八「沖縄における貿易陶磁」『沖縄埋文研究』V
沖縄県立埋蔵文化財センター

瀬戸哲也二〇一五A「一四・一五世紀の沖縄出土中国産青磁について」『貿易陶磁研究』
No.三五 日本貿易陶磁研究会

瀬戸哲也二〇一五B「一四・一六世紀の沖縄出土龍泉窯系青磁における生産地の模索」
『中近世陶磁器の考古学』第一巻 雄山閣

瀬戸哲也二〇一六「一四・一六世紀の沖縄出土龍泉窯系青磁における生産地の模索
(二)」『亀井明德氏追悼・貿易陶磁研究等論文集』亀井明德さん追悼文集刊行会

瀬戸哲也二〇一七「沖縄出土貿易陶磁器の時期と様相」『第三五回中世土器研究会
貿易陶磁研究の現状と土器研究』日本中世土器研究会

太宰府市教育委員会二〇〇〇『大宰府条坊跡XV ―陶磁器分類編―』

長直信二〇一一A「豊後府内における京都系土師器導入前後の土器様相 大友館跡
の形成過程解明にむけて―その一―」『古文化談叢』第六五集四分冊目 九州古
文化研究会

長直信二〇一一B「大友氏館跡調査研究の現状と課題―考古学的成果を中心に―」『福

岡大学考古学研究室調査研究報告第一〇冊 福岡大学考古資料集成四』福岡大学

考古学研究室

長直信二〇一五「第四章 大友氏館跡基準資料について」『大友氏館跡I』大分市教
育委員会

長直信二〇一八「第二章 大友氏館跡出土の土器と権力―その様相と特質―」『戦
国大名大友氏の館と権力』吉川弘文館

坪根伸也・塩地潤二〇〇一「豊後国の土器編年」『大分・大友土器研究会論集』大分・

大友土器研究会

坪根伸也二〇〇八「大友館の変遷と府内周辺の方形館」『戦国大名大友氏と豊後府内』高志書院

東京帝国大学史料編纂掛一九一七『大日本古文書 家わけ五ノ一 相良家文書之一』東京帝国大学

東京大学史料編纂所二〇〇三『大日本古文書 益田家文書之二』東京大学出版会

中井淳史二〇一一『日本中世土器の研究』中央公論美術出版

中井淳史二〇二二『中世かわらけ物語 もつとも身近な日用品の考古学』吉川弘文館

長堂綾・島弘二〇一四「渡地村跡の概要と青磁集中部」『第三五回日本貿易陶磁研究集会発表要旨・資料集 琉球列島の貿易陶磁』日本貿易陶磁研究会

中山圭二〇一九「熊本県南部の様相―沿岸部を中心に―」『第四〇回日本貿易陶磁研究会研究集会 南九州から奄美群島の貿易陶磁 発表要旨・資料集』日本貿易陶磁研究会

中山圭二〇二一A「菊池氏関連遺跡「限府土井ノ外遺跡」の輸入陶磁器に関する研究」『菊池一族解體新章』巻ノ二 菊池市教育委員会・菊池文化研究所

中山圭二〇二一B「菊池氏関連遺跡「限府土井ノ外遺跡」の貿易陶磁器」『第四一回日本貿易陶磁研究集会発表資料集「最近の話題の遺跡・注目される研究から」』日本貿易陶磁研究会

那覇市教育委員会二〇一二『渡地村跡』

並木誠士二〇一七『日本絵画の転換点 酒飯論絵巻―「絵巻」の時代から「風俗画」への時代へ』昭和堂

二木謙二一九九九『中世武家の作法』吉川弘文館

乗岡実二〇〇〇「備前」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相―生産技術の展開と編年―資料集』全国シンポジウム「中世窯業の諸相―生産技術の展開と編年―資料集」実行委員会

埴保己二二〇一三『群書類従第二三輯 武家部』八木書店

藤原良章一九九七「中世の食器・考―〈かわらけ〉ノート―」『全集 日本の食文化 第九巻 台所・食器・食卓』雄山閣出版

南島原市教育委員会二〇一一『日野江城跡総集編一』

美濃口雅朗一九九四「熊本県における中世前期の土師器について」『中近世土器の基礎研究』X 日本中世土器研究会

吉岡康暢・門上秀叡二〇一一『琉球出土陶磁社会史研究』真陽社

脇田晴子一九九七「文献からみた中世の土器と食事」『国立歴史民俗博物館研究報告』第七一集 国立歴史民俗博物館